〈座談会〉

座談会：教育現場の闇と光

Roundtable Discussion : Darkside and Brightside of Education in Japan

藤井　啓之　　村瀬　真未　　川村　潤子　　原田　忠直

Hiroyuki FUJII　Mami MURASE　Junko KAWAMURA　Tadanao HARATA

【座談会開催までの経緯と主旨】

原田：本日の座談会は，街中の雑踏から離れて，村瀬さんがお住いの岐阜県郡上八幡で開催しています．会場は，古い町家住宅を改造した「越前屋」という施設の一室をお借りしているのですが，非常に落ち着いた雰囲気で，話しが弾みそうです．さて，本日のテーマは，学校教育の現状について話し合うことが主旨ではありますが，このメンバーを結びつけたのは，2019 年 7 月に岐阜市内の中学校で起こった事案（いじめを苦にした自死）が，一つのきっかけです．村瀬さんは，岐阜新聞の記者としてこの事案を追い続けています．とくに，2020 年 7 月から始まった「いじめと向き合う」という連載は，この事案をさまざまな角度から捉え，さらに，多くの読者も巻き込みながら，いじめ問題の本質に迫っています．また，川村先生は，この事案を受けて，日本福祉大学の紀要に「あなたのクラスでいじめがあった場合どのように対処しますか ―岐阜市における中学 3 年生児童の転落死を受けて―」(『現代と文化』 140 号）というエッセイを書いています．もちろん，お二人は，それぞれの立場からこの事案について発信したということですが，たまたま，村瀬さんが，このエッセイを見つけ，川村先生を取材したのが，いわゆるお二人の出会いです．ただ，その取材のなかで，意気投合し，正確に言えば意見がピタリと合い過ぎたんでしょうね．川村先生から，「すごい出会いだった．座談会をやりましょう」という熱意ある提案をいただき，教育の専門家で，それに村瀬さんと同じ広島大学の出身である藤井先生にもちょっと語り合いませんかと誘ったことが，座談会を開催するまでの経緯です．さらに，個人的には，村瀬さんの経歴について大変興味を持ったことも，座談会を開催したいという動機でもあります．まず，自己紹介も兼ねて村瀬さんからお話しいただけるでしょうか．

村瀬：広島大学を出て，地元の岐阜に戻ってきて，小学校と中学校で教員を 6 年間しました．ただ，2012 年の 4 月から 1 年間は震災支援で南三陸にいっていました．震災支援派遣業務です．

その教員職みたいな枠がありまして．岐阜からはまず 5 人が派遣されました．その後，岐阜に戻ってきて中学で 2 年間勤めたのち退職して，青年海外協力隊でドミニカに 2 年間行って，帰国後，岐阜新聞社に入りました．

原田：ドミニカでは学校教育に携わったのですか？

村瀬：そうですね．現地の 18 から 20 歳前後の教員をめざす学生，日本でいうと教育学部みたいな学校です．学生たちに主に数学を現地語のスペイン語で教えました．

原田：ドミニカというか，海外青年協力隊というのは，教職の教員を辞めないと参加できないのですか？

村瀬：現職で参加することもできます．ただ，半分くらいは，日本の教育現場に限界を感じて辞めていく人も結構います．私は退職していきました．

原田：2 年で岐阜に戻られ，それで今の岐阜新聞に？

村瀬：そうです．主に教育関係の取材をしています．

原田：広島大学の出身者には，そういう経歴の人は多いのですか？

村瀬・藤井：いやいや聞いたことないなあ．

村瀬：ただ，岐阜県でも広島大学出身で高校の教員をしている人は多いです．

藤井：同期でいます．

村瀬：やっぱりいますよね．ただし，小中の教員はほとんどいないです．

藤井：でしょうね．やっぱり小中の教員は県内での人事の学閥があるので，地元に行って地元の学校に就職するという．

村瀬：その傾向はものすごく強いですよね．

藤井：逆に中高は筑波大学か広島大学かっていう，それもまた学閥なので西日本は広島大学に行っ

て高校教員になると出世しやすいという世界があるんですよね．

村瀬：まだまだありますよね．

藤井：学閥という点では，愛知教育大学もありますね．昔は本当に愛知教育大学が大半を占めていたんですけど，これはよろしくないってことで，例えば，教員養成をしている私学ってあるじゃないですか．名古屋女子大学など結構教員輩出している大学もあると思うんですけれど，採用がないと教員養成も減るというような事情もあると思うんですが，大学ジャンルによるある程度の配分もあると，ある元校長会長から聞いたことがあります．必ずしも教員採用試験の実力だけで決まるのではないのかもしれません．教員採用試験結果のすべてが公表されているわけでもないですからね．

原田：それは中高？

藤井：いや，小中です．

村瀬：いつまでもやっぱり小中はありますよね．しがらみみたいな．

藤井：特に師範学校が二つあったところはよろしくないとききますね．新潟とか．

村瀬：新潟ですか．

藤井：教育問題，学閥同士の勢力争いとか結構ありましたからね．今はもうないでしょうけど．愛知では，戦後しばらくは，岡崎師範と名古屋師範学校の間であったようです．

村瀬：そのあたりの話を突っ込むといろんなものが出てきます．

藤井：そうそう，たたけば埃がでてきます．

【若手教員の境遇】

原田：なるほど．学閥とかいうか，教員の資質の問題は今日のテーマの一つでもありますが，村瀬さんの経歴に話を戻しますと，ドミニカに行こうと決心した理由というか，それを契機に教員を辞めようと思ったのですか？

村瀬：やっぱり一番は，生徒指導が割ときつい中学校だったんですよ，最後のところが．県内でも喫煙とかかなり問題があるところで．ここで一つ，教育の現場の問題だと思うんですけれども，一度教育委員会とか文科とか，私だったら震災派遣とかで，イレギュラーな形で外に出た人を県内の現場に戻す時って，ものすごく期待感をかけられるというか．年齢関係なく，ちょっとその年齢には相応しくないような立場で，校務分掌で入れられたりとか結構あって．私も戻ってきてすぐに生徒指導主事とか，25 歳とかだったんですけど．

川村：えー．

村瀬：えーと思いますよね．その年齢でその仕事を任されるというのは，ありえない．現場では，それはやっぱり経験積んで，いろんな積み重ねてきたものがあって，年相応で役職についていくっていうものが学校現場の中にはあるんですけれども，それをちょっと飛び越えてしまうような，管理職の見方というものがやっぱあるんだと思うんですね．私もそれでいきなり任されて，周り全部大ベテランの人達で固められて，何を職員会議で言っても全部覆されるというか．話全然きられちゃうというか．全然生徒は変わって行かないし，結局「一室に閉じ込めて反省させとけ」みたいなのが，自分の中でこれは教育としていいのかなと思ってしまって．疑問が膨らんでしまって．これをやり続けた先に教員になっていきたいとか，これから教員をやっていく自分というものがものすごく嘘をつくようなものがありまして，これはなりたかった自分じゃないっていうのに気付いた時に，離れようと思いましたね．振り返って，今いろんな取材でいろんな先生に会いますけれども，中堅の方とかも．続けていける人ってそれを流せる方というか，自分は教員としていいのだろうかという考えがあまり深みに入らない人がやれてしまう，多分．今退職が多くて若手が入ってこないという中で，全然中堅に任せられないというのは，一つ問題の要因としてそういうのがあると思うんですけれども，経験としてやってきてない人が 40 代・50 代で残ってきてしまってると，下もついてこないし，上もやりづらいみたいな．なんかそういうのが取材でも感じますけれどもね．

原田：若手教員を育てることが目的と理解していいのかな？

村瀬：たぶん，そうだと思います．どうなのかな，それは．川村先生の話も聞きたいけれども．でもやっぱりそれは育てたいというか，難しい問題にあたらせてより伸ばしたいのか，もしくは今いる箱の中では誰も任せられないから任せるというか，任せるといろいろクレームとかになるから．なんとなく去年行ってきたことのある人で任せちゃおうっていう発想なのかもしれないですけれども．そういうのは結構あるのかなと思います．

川村：村瀬さんが辞めた後はまた若手がやってたんですか？

村瀬：若手がやってましたね，結局そこは．

藤井：ところで，東日本大震災の派遣業務というものはどういう仕組みですか？

村瀬：岐阜県は教員の人事交流を宮城県と行っています．そのつながりで震災後，教員派遣の協定書を締結したんです．福島は原発のことがあって人は送れないっていうのがあったので，岐阜県からは宮城県の南三陸と気仙沼にそれぞれって．

藤井：そこで派遣した教員が力をつけているんだっていうのを，教育委員会として示したいっていうのがあるかもしれないですね．自分たちの政策が良かったんだっていう証明をしたいというか，現場でより使っていけるみたいなね．

村瀬：そうかもしれないですね．

原田：川村先生から聞かされているのは，新任の若手が入ると生活指導の担当になることが多いそうですね．

川村：はい．私が勤める学校をみていても生徒指導部に配属される傾向が強いと感じています．公立に受かった知り合いも一番初めにどこに配属されたのかと聞くと，生徒指導部とこたえてくるので，新任は指導部にっていうのがあるのかなって思っていました．

藤井：いや，なんかね，時代が違うんだけれども，僕らが若い頃はいわゆる理想の教員像を求めている若い教員に対して，そんな綺麗事で通用するのかって言って，生徒を殴ってやっと一人前になったなみたいな教育現場の雰囲気があったんですよ．例えば若い頃に，なめられちゃダメだって叩き込まれるっていうのがあるんじゃないですかね．

原田：自分がなりたい教師像と齟齬が出てくるというか，矛盾が出てくるのではないですか．

村瀬：矛盾がでてきますよね．結局力があるというか理想が高い人ほど，研究校とか実習校といわれる教科であったり何かの研究に力を入れている学校に入れられる．これは卒業した大学のブランドでも入れられることがあるんですけれども，そういう人こそ，現場でまかりとおっている「これは違うな」ていう場面の時に理想と現実のギャップに気づいちゃうんで．その時に良い人材ほど残っていかないというか，どこかの時点で辞めたっていう風になる人がけっこう最近多いんじゃないかなって思いますけれどもね．

原田：サラリーマン化する人しか残らないということですか．

村瀬：もうそうじゃないですかね．

原田：サラリーマンになりたくないから，教員を目指す人が多いと思ってましたが，違うようですね．

村瀬：そうですよね，でもそれが本来はそうだったんだと思うんですけれども．

藤井：でも今むしろ安定志向で，公務員の一種みたいに考える人も多いかもしれないですね．

村瀬：多いんですかね，やっぱり．昔は先生に個性があったというか，この先生だから，例えばここは欠けているけれども，ここが長けているから子ども達がついていくっていうのが，大人の関係の中にもあったし子ども達もこの先生だからついていくとか．それでうまく成り立ってたことが多くあったと思うんですけれども，今って本当に個性がないというか，みんな同一，均一といった印象を受けますね．

藤井：まあ，いろいろな理由があると思うんですけれども，僕はドイツの研究してるのでドイツに行きます．ドイツでは 10 歳までが小学校なんですよ．日本でいえば 4 年生まで．そのあと，3 分岐制ってのがあって 5 年生からエリートの教育，ギムナジウムと，ドイツはマイスター制度っていうのがあるので手に職を付けていくようなレアルシューレと，言葉はよくないですが，やや行き場のないような子が行くハウプトシューレがあるんですよ．特に南部はそうなんですよね．ドイツは州ごとにずいぶん法律が違います．憲法も州ごとにあるような国なので．この一番大変な学校のミッテルシューレ，日本語で言うと中等学校と名前を変えたところに行ってきたんですけどもね，そこの先生と話している中で，その方は 62 歳の方なんですけれども，「昔は本当に学校は楽しかった．週に 60 時間働いてた」っていうんですよ．でも今はとにかくいわゆる学力テストで点数をあげなくてはいけないので，「テストで点数を上げることが教師の役割になっているので本当に面白くなくてもう教師を辞めたい」っていうんですよ．若い人も教師の仕事ってそういう子どもたちと接して，子どもを助けてくっていうのがなくて，魅力がなくなってきていて，若い人が教師じゃなくって会社員になりたいっていう人が増えてきていて，人材が非常に不足してきてるって話です．

原田：ドイツでも？

藤井：ドイツでも．いわゆる国際学力テストとかの影響が大きいですよね．生徒指導の問題だけ

じゃなくっていろんなところで，いろんな仕事の標準化が進んできているのかな．制度的な圧力の中で進んできているっていう要素はあるんですかね．

原田：今のドイツの話だと，はっきりした3つのラインがありますよね．もちろん，小学校5年生で決断するのは早すぎるという議論もありますが，それはさておき，結構，目的化が早いですね．そうなってくると，それぞれ個性がある教育ってものができてるということですか．

藤井：これまた複雑でドイツは大学入試がないんですよ．アビトゥアーっていう高校卒業認定試験っていうのがあって，それは高校3年生の時に受けるんですけれども，高3で1年留年して2回まで受けられるんですよ．でもそれには2回しか受けられないから，受からなかったら大学に行けない．日本でいうと一浪までしかできない．だからそっちに行くのも結構過酷な道でもあるんですよね．

原田：昔からそうなんですか？

藤井：そうです．さっきもいったように職人の仕組みがあって，結構所得が高い，靴職人とか革細工の職人とかマイスター取ってるとすごくお金が入ってくるんですよ．大工さんでもね．というのがあるので，別にそっちに行ったから将来が安定しないってわけでもないので．ただ，だんだんそういう仕事も減ってきてるのでエリートのギムナジウムに行きたがる割合が増えてきてるんですけれども．だから将来どの職に就きたいかっていうのでだいぶ違ってきているんですよね．どの道でも食ってけるっていうのがあるから成り立ってる仕組みがあるわけで，日本のように大卒じゃなきゃ給料が安いっていう社会になってくるとちょっと厳しいかなと思いますけれどもね．

原田：なるほど．ドイツもいろいろ問題を抱えているようですが，ドイツの状況は一つの比較対象として，あとでいろいろ繋がってくるはずですが，ひとまず，伏線を引いたということとして，岐阜県で起こった3年前の事案について押さえておきましょう．

【いじめ事案の背景】

村瀬：もう3年前ですね．2019年の7月ですので．ちょうど2年経ったところですね．それが岐阜市の事案であって，やっぱり現場にいらっしゃる川村先生が問題視，個人的に問題とされる所があってそのエッセイを私が見つけてファーストコンタクトが叶ったという．

川村：そうですね．あの事案をニュースで見たときに，教員採用試験で抱いた違和感が思い起こされたということもあり，あのエッセイをかきました．

原田：川村さんがあの事案を聞いて，一番初めに気になったのはどのような点でしたか？

川村：メモをシュレッダーにかけたということですね．

藤井：子どもからのメモね．

川村：はい．女子生徒がクラスでのいじめを報告するようなメモを担任に渡したのですが，そのメモは事件後シュレッダーにかけられていたことが分かりました．メモがシュレッダーにかけられたことに対して問い詰められますが，その際の校長の発言が引っ掛かりました．校長は，「教員間でちゃんと情報共有ができていたら，そのメモが大事だと気づき，メモをシュレッダーにかけることはなかっただろう」というような発言をしています．ですが，「情報共有」とは現場で常にいわれている．担任，教科担当，学年主任とかとの情報共有は大切だといわれているのに，それができていなかったってどういうことだと思いました．またあのエッセイに詳しくかきましたが，教員採用時にも問題が起きたときの対処法を知っていることが重要視もされているのに，情報共有がなされていないという発言に，現場はどうなっているのだろうという疑問が浮かびました．

原田：その疑問を起点にエッセイを書いたわけですね．そして，村瀬さんは，ずっとこの事案を追いかけているということですね．

村瀬：事案が起こった初動の時，一人の命が亡くなった事案なので取材等は警察担当の記者が行うんですよね．その中に法律に詳しい記者とかも入って，記者としてチームを作るんですね．教育に通じている，得意とするとか関係なく，それこそ警察のように教頭，校長の自宅周辺を張ったり，担任の先生とかに話を聞けるように同僚の先生をつかまえたり．被害者加害者それぞれの立場で最初の 3，4 か月はそのメンバーが取材を任されます．でも悲しいことに新聞とかメディアの情報ってほとぼりが覚めるとさっと引いていってしまうので，ちょうど 1 年後の 7 月を前に，もう少し掘り下げて教育の話を追って連載していく責務があるんじゃないかという話になって．地元の話なのでね．そこで思いのある記者であったり，教育関連をやってきた私だったり，そういう人が 5 人，取材班になりました．調査の報告書とかもちょうどまとまってきた時期だったので，それでもう少し外堀の人をあたったり，そこからここ 1 年間は，子どもの話と，保護者，そして今どんなことが子どもの世界で起こってるのかとか，現場の話もありますし，そういうのをほぼ 1 年間 4 回に分けて連載をしました．4 部に分けてですね．

川村：この前も関連記事が出ていてましたよね．

村瀬：はい，この間 7 月 3 日がちょうど 2 年経った時だったので，そこで一つ出しましたけれどもね．

川村：そういうことなんですね．

原田：いじめが，なかなかなくならないのは何故なのかって，いつも思っています．理由はいろいろあるでしょうが，川村先生の一つの見解は，教師に対する不信感だと理解しています．連絡を取っていたにも拘わらずね．あと，川村先生がよく言われているのは，教師の孤立問題ですね．教員同士で，何故，相談しないのかという疑問ですね．

藤井：名古屋なんかでいうと，結構出てくる順が決まってるんですよね．まずはクラスで問題があるときにまず担任が対応しなさいっていって．それで解決しなかったら教務主任が出て行って，それでもダメだったら教頭で，最後に校長が出てくるっていう順番が．まずは担任が何とかしろっていうのはすごいあるんですよ．

村瀬：そうじゃないかなって思います．

藤井：だからそこで出来なかった時に教務主任に相談することが，自分の力がないってことになるんだよね．そういうことだから憚れるんじゃないかな．

村瀬：それは大きいでしょうね．

川村：それに，普段の指導が悪かったから問題が起きたんだっていうところから始まっていると思います．「普段の指導ができていたらまず問題はおこらないでしょ」，「いじめとかがおこらないような雰囲気を普段からつくっておかないと」，っていわれますよね．

村瀬：そうですよね．それが一番本音だと思います．

川村：問題が起きた時点でもうアウトなんですよね．

藤井：指導不足だよねってレッテル貼られるよね．

原田：20 代前半の若い先生に指導力を求めるのは，少々酷ですね．

藤井：でも初任で担任を持ちますからね．初任で即やらなきゃいけない．

原田：常勤というか，私たちの感覚だと非常勤に近いのですが，常勤でも担任を持たされるのですか．

村瀬：そうですね，今はそれが当たり前ですね．

原田：人手不足？

藤井：要するに予算の削減ですよね．小泉さんの時でしたかね．教員の給料半分は国から出てたものを 3 分の 1 に減らしたんですよ．常勤の割合を増やさないと自治体がやってけないっていう話になって，そうなってきたんじゃないですかね．

村瀬：非常に重たいですよね．最初の 20 代，入ったときから全部 60 代とか 50 代の人がやってきたものをそのまま全部を求められるっていう．

原田：無理でしょう．

村瀬：無理ですね．事案があった学校は，研究校かつ教育実習校でして，教員の中においてはものすごくエリート校なんですよ．教員界ではそうした学校に勤務して，異動する際は，「次は市町村教育委員会や県教育委員会に行く」というレールが決まっている．そういう登竜門的な学校は岐阜にはありますね．

【モデル校】

藤井：いわゆる事実上の附属校だよね．愛知でいう愛教大附属っていう．

原田：岐阜大学って教育学部はあるよね？

藤井：ありますね．

原田：岐阜大学の教育学部の附属？ 小中？

村瀬：小中ありますね．

原田：小中もありながらの？

藤井：準附属みたいな？

村瀬：準附属，そうですね．

原田：教育実習もしっかり受け入れて？

村瀬：受け入れて，かつ先生たちのいろんな研究もそこが先行してやるっていう．

村瀬・川村：モデル校．

原田：モデル校というのは誰もが知っているのですか？

川村：生徒たちも知ってますよ．先生たちがここはモデル校だからっていいますよね．

藤井：9つでしたっけ？

村瀬：岐阜市全体で9校です．岐阜市立小中学校9校が教育実習校と研修校を兼ねています．

藤井：記事の中で増やしたっていうのがあったじゃないですか．だから地域ごとにバラバラでないと，実習に通う学生の距離とかも考えると分かれてないと．

村瀬：そうなんですね．でもそれはずっと変わらない．モデル校は．何年間で他の学校が担うとかでなく，ずっと一貫してそこの学校がやっていくという．

原田：でも年配の先生もいらっしゃるんですよね．中堅も在籍していますよね．

村瀬：いらっしゃいますね．

川村：でも若い先生が多いですよね．

村瀬：若いですね．20代30代ですね．

藤井：採用の仕方が失敗していて，団塊の世代でがばっと採っていたから．今の40代ぐらいがすごい少ないんですよ．

村瀬：完全にいびつになってますよね．

藤井：逆に言うと団塊の世代が管理職になるのは難しかったけど，今の 40 代は誰でも管理職になれる感じですよね．

原田：むしろやらないと学校運営が難しいということですか？

藤井：やっていけない．上が抜けた分ごっそりとったからものすごく若くなってる．

村瀬：年齢の偏りはありますね．

原田：上の人たちは若い人たちに頑張って欲しい，1 日も早く管理職になってほしいと思ってるのかな．

村瀬：思ってますよね．

原田：受け持ちのクラスで問題が発生すると，それが汚点になるということですか？

村瀬：汚点ですね．川村先生が言ったように若手がそうやってごっそり研究校や研修校，教育実習校に行くので，皆さん本当お若いですよね．20 代 30 代とかでそこに一度行けば安定というか，このあとは教育委員会いって教頭になって，ていうエスカレーターが見えてくると思うんですけれども，その 30 代とかの先生の中でもまた変なライバル意識というか…….

原田：競争心？

村瀬：競争心はもう絶対ありますよね．いろんな授業公開をする時とかでもね．だから，より言えない．本来は教務主任とかの上司に相談しにくい時には，まず横の人たちに言えるんじゃないかなって思うんですが，それすら教育実習校とかだとストッパーがかかるんでしょうね．気持ちの中で．

原田：あまりよろしくないことですね．

藤井：難しいのは今の管理職が若い頃は，新任で入っても，まあ先生若いからって言って保護者が大目に見てくれたし，育ててくれたんだけれども，今はもう容赦ないですからね．保護者が．本当に容赦ないから．

村瀬：若いゆえ，余計に言いやすいというか．

藤井：そう．本当に．よく卒業生とかが困ってるのは，「あんたそんなこと言ってるけど子ども産んだことないでしょ」っていうことを平気で言ってくる．「あなたには教育なんか分からないわよ」ってことを親から言われたりしてるんですね．

原田：親も当然，モデル校だと理解しているなかで，モデル校に来てる先生に求められる水準は高くなりますね．

村瀬：そう，そうでしょうね．

原田：川村先生も言ってたように，若い先生はちょっとかわいそうじゃない？

村瀬：そうでしょうね．

藤井：さっき研究校って研究するっていってたけれども，政策になってることを研究する，しなきゃいけないので，「主体的対話的な深い学び」っていったらそれをどう授業の中でやるのかとなって，全然，生徒の生活とか背景とか見てなくって，そこのところをわかってないのになんで対応できるんだよって思うんだけれども．上から言われたことをどう実現するのかっていうことに終始しがちになっているので．

村瀬：そうですね．そこにまた個人の評価ってのはついてくるというか，上から降りてきたものに対して如何に対応できるのかっていうのが大事であって．

原田：話が少し戻るんですけど，東北に行かれたじゃないですか？ 村瀬さんの場合は本当に行かなきゃと思って，その思いが強くて行かれたと思うんですけれども．

村瀬：そのタイプですね．

原田：逆にいうと，東北に行くことが，出世に結び付くと思っている人もいるということですか？

村瀬：いるいる，います．ベテランの方で，これ（震災支援派遣）にいったら次は教育委員会で退職迎えるから１年行ってくるわ，という感じでしたね．

藤井：教育委員会で退職？ 現場に戻った方がいいんじゃないですか．

村瀬：いや，でもわかんないです．どんな思いでいるか．

藤井：教育職と行政職では給料が違うんで．

村瀬：まあそうですよね．

藤井：教育職の方が高いので．行政職でやめるよりか教育職でやめたほうが退職金が多かったりしますよね．

村瀬：そこでどう思われてるかどうかわかんないですけれども，最後の課長次長っていう．

原田：名誉職ね．

村瀬：そうですね．

藤井：ちょっと話はそれますが，僕は全国の研究会に入っているのですが，東北の教員の話を聞くと，震災直後はとにかく本当にテストとかそういうのじゃなくて生きているのが素晴らしいっていう学校だったのに，もう１年もしたら，学力テストの点数をどうするのかみたいな話になっていて，１年しかもたなかったねっていう風に話してましたね，現地のみなさん．

村瀬：あーなるほどね．

原田：1 年間は，昔のような純粋さがあったんだね．

藤井：1 年はあったんですね．

原田：しかし，なんというか，教員のサラリーマン化以上の深刻な問題が隠れていますね．

藤井：統制が厳しいんですよね．2000 年ぐらいからいわゆる職員会議も，今まで学者の中でも意見が分かれていて協議する機関だっていうのと，校長の補助機関だって意見があったんだけれども，法律改正で校長の補助機関だっていうのが決まってしまったから，意見をいうことは基本できなくなってしまったんですよね．その頃から教員評価，例えば東京とか大阪の人事考課制度っていう，校長が「あなた戦力外，うちにいりません」っていうことをいって，人事を動かせられるようになっちゃって，そうやって上の評価を気にしないと教師が働けないみたいなのがすすんで，かなりがんじがらめになってきていて，2000 年以降本当に学校は窮屈になってるんですよ．

で，1995 年だったかな．2000 年頭ぐらいかな．九州で女の子がカッターナイフで同級生を殺したというのあったじゃないですか，教室で．あの頃からいわゆるゼロトレランスっていう生徒指導，生徒の意見や言い分を一切聞かずに，決まりを決めてその通り指導しなさいみたいなのが入ってきて．それから 2010 年『生徒指導提要』が作られて「毅然とした対応」っていうのが入ってきてるんですよね．だからその頃から生徒の言い分を聞かずに上から押さえつけるっていう傾向は強まっていますね．

村瀬：管理的な感じですよね．

藤井：そのことと教員の評価がセットになってきてるもんだから，教師が自分の思ったこと，たとえば，良し悪しは別とし，金八先生みたいなことすると評価が下がるっていう事になってきてしまってるですよね．非常にやりにくいですよね．

村瀬：藤井先生が言われたように，校長からの評価，常に教員間で評価されてもいる．教室でも先生の評価で中学 3 年とか高校入試に影響してくるので，やっぱり担任の先生，教科の担当の先生の「反応がいい」とか「良く話を聞いている」という評価が数字に直結する．逆に，先生の考えとは異なるけれど，意見としてはものすごく創造的だったとしても，それは評価されず．学校内で，上から下に管理されて評価が付けられるというシステムがものすごく硬いなと感じます．

【校長の存在】

原田：評価？ 校長先生の評価とは？

藤井：全部面談しますよ．

村瀬：ありますね．

藤井：自己評価して面談して，いや君こうだよねって言われて．それがボーナスに反映される仕組みになっているので．今，なってますよね？

村瀬：なってると思いますね，おそらくね．

藤井：毎年毎年．校長が変わればまた変わってくるし．

原田：評価は校長の主観的ということですか？

村瀬：オール主観ですよ．

藤井：校長かわると大きくカラー変わりますからね．

村瀬：うん！ ほんとに．

原田：主観だけで？ 明確な基準がなかったら，ただ独裁者が一人いるということですね．

藤井：いや，そうですよ．

原田：学校なのに？

藤井：千葉の塩崎先生っていう人がね，『学校珍百景』という本を一巻と二巻と出していてね，その二巻のところに僕も少し書いたんですけれどもね，そこに記事を書いてる学校，地域名とか書いてないんですけれども，東京のある区の先生なんですけど，その区って貧困な世帯が多くて相対的に学力低いんですよ．でね，その中で特に下位の学校に，あと 1 年で退職だった校長を押しのけて，その区の別の学校で上位になった学校の校長が異動して来て，「前の学校では 1 位になってみんなでビールかけして胴上げをしてもらいました．ここでもやりましょう」ってなってね．学力テストは 5 月でしょ？ 試験対策で 4 月から毎日午前中に国語 2 時間，算数 2 時間とやるわけです．

原田・村瀬・川村：えー．

藤井：でも順位は上がるんですよ．テスト対策をやればね．

原田・村瀬・川村：そりゃ上がるよ．

藤井：結局その校長が来たらテストの順位は上がったけど，そのうち登校しぶりが増えたと．

原田・村瀬・川村：毎日午前中の時間それやったらそりゃそうですよ．

藤井：辛いじゃないですか．だけど生徒が元気に来てるっていうのを評価する校長だったらそうならない．点数しか見てない校長が来たらそうなっちゃいますよね．本当に校長でガラッと変わる．

原田：怖いね．

村瀬：怖いですよ，本当に．

原田：人が人を評価することは，本当に難しいですよね．ただ，その基準はどのようなものなんでしょうかね．営業マンのように目に見える判断材料があるわけではないでしょうから．子どもの成績が上がれば評価は高く，いじめ問題が発生すると評価が下がるということでしょうか．親たちの評判とかも基準の一つになるということでしょうか．

村瀬：あのいじめ事案があった学校に子どもを通わせている保護者の話では，例えばA先生の学級の生徒にB先生が「おまえの担任の先生（A先生）は，どう？」と聞くんだそうです．さらには『おまえの担任（A先生）は，他の先生から「はずれ」っていわれてるんや』「授業分かりづらい先生の学級で可哀想やな」と吹き込んだりするらしいと．子どもは真に受けますから，家で親に言う．A先生が若手でバリバリで，学級もまとまっていたりすると，そういうのを面白く思わない同年代や一回り上の先輩教員が，何気ない会話の中で管理職の先生に告げ口のように言う．「あの先生ああいう風らしいですよ」みたいなことを伝えていくと，校長の耳にも入る．A先生にしてみたら，自分が知らないところでだんだんと子どもや他の先生に「間違った評価」や「勝手につくられたフィルター」ができて，何だか学級がぐらぐらして，生徒や保護者が離れていく感覚ができていく．子どもや保護者は，見えている部分だけで評価するしかないので「A先生の学級，何だか落ち着かないんです」となる．子どもが先生の評価の話をしてくるという保護者は，「学校の先生の間で一体どんな話をしていて，子どもにもオープンにしているんじゃないかなと心配になる」と話していました．先生の評価の根拠が，子どもの声や同僚の声に偏るというのは，特に研究校とかにはあるように感じます．それって，また一つ病的なものかなと思いますけれどもね．

藤井・川村：まずいですね．ほんとに．

原田：非常にまずいね．いや一つの抵抗は村瀬さんのように辞めてくんでしょね．若手を中心にね．もうやってられなくなりますね．

藤井：子どもは永遠に救われないですね．

川村：やる気のある先生こそ，疑問を感じてやめていってしまいますよね．

原田：負のスパイラルですね．校長によって全然違うだろうしね．しかし，校長は数年で変わり

ませんか？

村瀬：2 年，3 年……，2 年とかですかね，平均で．

原田：早いよね．

藤井：岐阜はそうかもしれないね．まぁ時代で違うかもしれないですね．

原田：でも 2 年ってさ，何もできないよね．いい悪いは別にしてもね．

藤井：多分研究校の校長は校長のなかでも出世コースなんですよね．わたしの地域でも，小中でいったら，〇〇中学校の校長になって「上がり」と聞いたことがあります．

原田：どうでもいいけどね．

村瀬：本当にどうでもいいんですけれども，そこまでの年齢，立場になるとそういう形でしか競えないというか，自分を認めてもらえないっていうのがあるんでしょうね．

原田：絶望してるんだけど．

藤井：昔からなんだろうと思う．うちの祖父が岡山の田舎で小学校の校長だったんですけれども，僕が帰省する度に，あの君がどこどこの教頭になったとか，どこどこの校長になったとか，毎年，僕達孫に延々と聞かせるんですよ．全然興味ないのに．

村瀬・川村：そうですよね．

藤井：そんなことにばかり関心を持っている上の人たちも，それなりにいるんでしょうね．

川村：校長ということでちょっと話は変わるのですが，何か問題があった時って，校長が責任をとらないじゃないですか．あれはなぜですか？

藤井：とらないんだ？

村瀬：とらなかったですね，全然．

川村：どこかに隠すというか，異動をさせますよね．

藤井：隠すのはよくあるよね．

川村：学校の責任っていうのはどこにあるんですかね？

村瀬：なるほどね．問題の時の責任の所在というものですね．

藤井：最終的にはそれこそ市の職員なので市が賠償金を払うっていうのが責任になるんじゃないですかね．

川村：私立だったらどうなりますかね？

藤井：私立だったらわけわかんないと思いますよ．

川村：ハラスメント関係の職員研修を受けたことがあるのですが，ここは私立なので何か問題があったときは個人で責任をとっていただくことになることもありますと言われた事があります．恐ろしいなと思いました．

村瀬：守られるものがないですね．

藤井：でも公立もそうですよね．今は，教員が入る保険で裁判費用を負担する保険てのもありますからね．

【いじめ問題の後始末】

村瀬：今回の岐阜市は和解金，岐阜市の教育長の名前で出したっていうので一つ，幕を閉じたというところがあったんで．

藤井：異動で終わりだよね．問題があった時は．校長は．名古屋市の中学生が自死したときも結局前の校長がどうしたのかな，休職しちゃったのかな．対応しきれなくて病気になって休職することとかもありますよね．昔，5000 万円恐喝事件ってのがあったの知ってます？

原田：ありましたね．

村瀬・川村：んー．知らないです．

藤井：一人の中学生に寄ってたかって 5000 万円恐喝したって．同級生とか同級生の先輩とかそれに絡んでるチーマーとか．

村瀬：5000 万円も持ってる？

藤井：お父さんが事故で亡くなって，生命保険が出たとかがあって．その調査に昔入ったことがあるんですけれども．民間の研究団体で加害者の親にも話を聞きにいったりとか．

村瀬：調査委員のご経験があるんですね．

藤井：公式ではないですよ．民間の教育研究所があって，そこでチーム作って学校の動きを周辺などから聞いてまわるとか．加害の側の子どもたちのご家庭や友人などにも話を聞きに行ったりしたんですけれどもね．その時，もう校長は病んじゃって完全に後ろに下がって，休職していましたね．後は教育委員会が対応するみたいな．今でもそうですよね．校長隠しますよね．愛知，名古屋では，記者会見も，教育委員会がでてきて，校長は後ろ下げるっていう感じ．

村瀬：岐阜のも当該校の人出てこないですからね．で，その翌年，先生達はごそっと抜けましたね．次の人事で．

藤井：それと箝口令敷かれてるんですよね．

村瀬：そうですよね．

藤井：全くしゃべっていけないっていう．だから当該の学校の中の先生同士でも事件の話を話さないっていう．

川村：事案がおきた学校に通っている保護者と，幾度か話すことがあったのですが，あの事案が起こるまでは外というか保護者に対して，ホームページとかでオープンにしてた面があったのに，事案後はすごい閉鎖的になっていると聞きます．なるべく学校のなかをみせないようにしているっていう感じですかね．

村瀬：なるほどね．よりオープンに，これまで以上にしてくことが大事なんですけどね．

原田：でも学校の先生，なんか大変だね．そこまでして本当になんで学校の先生やりたいのかよくわかんなくなりますね．

藤井：やめても次の職がないと辞められないですよね，なかなか．

【学校スタンダード】

原田：なるほど．次がないというか．今日の話を聞いている限り，若手教員のキャリアアップに繋がるような働き方とは思えませんね．ところで，先ほどの藤井先生の話だと 2000 年代になってから，学校は，急変しているという感じですね．

藤井：変化は強くなりましたね．学校スタンダードが入ったのも，2010 年頃からですよね．春日井市の春日井スタンダードとかね．スタンダードは岐阜もありますか？

村瀬：やたらと聞きますね．

藤井：先生に当てられたら手の上げ方からとか，まっすぐぴってあげるとかね．当てられたら椅子を机の中に入れてからじゃないと発言してはいけないとかね．子どもは言いたくて，喋っちゃうじゃないですか．でも椅子入れてないから注意されて，椅子を入れたら言いたいこと忘れちゃう子もいますよね．どっちが大事なんだよっていう．でも学校全体のなかではそれを指導しないと駄目な先生っていうことになってしまう．

原田：しつけというか，いわゆる管理ですか？

藤井・村瀬・川村：管理ですねえ．

藤井：机の上の物の置き場所もね，ノートはここ，筆箱はここって全部決められていたりする．

川村：授業中の意思表示もそうですね．つけ足しとかこう指で表現します．

藤井：賛成とかね．

原田：ドイツってあるの？

藤井：ドイツはだめだから．ヒトラーのことがあるから．机にひじをつけてこうしないと．ハイ

ルヒットラーだと思われるから．昔は挙げてたようですが．

原田・村瀬・川村：そうなんだあ．

村瀬：そういうの学ぶべきですよね，現場の先生は．

藤井：笑い話で，高校って体育祭の時に，入場行進時に来賓席の前でこうやるじゃないですか(来賓席に向かって手を伸ばして敬礼するポーズ)．

村瀬：なんか見たことある．

藤井：ある年にドイツからの留学生がそれを見てショックを受けて．その年はなくなったらしいです．ぼくも中学の時にそうでしたよ．来賓の前だけで敬礼する．運動会ってやっぱ来賓のためなんだと思ったわけですよ．明治時代には，天皇や文部大臣が来て，地域全体でやるっていう兵士の訓練の場だったんて，その名残がずっと続いているんでしょうね．

原田：ところで，ドイツって校則とかあるんですか？

藤井：校則というほどのものはないですよ．クラスでルールみたいなのを話し合って決めるとか．ドイツは法律で生徒会の権限が位置付けられているので，生徒に意見を聞ずにルールつくれないんですよ．生徒，保護者の意見を必ず聞くようになってるので．だから日本みたいな，バカげた校則は絶対できないですね．

原田・村瀬・川村：笑

村瀬：最近校則見直しはありますけれどもね．

原田：本質的なところはなにも変わらないですね．

村瀬：変わらないですよね．

藤井：だから下着とか世間から注目を集めたものは，やめろみたいになるけれども，あとはLGBT 関係．それ以外はほとんど変わらないですよね．あれも最終的にすべて校長の権限なので．だから校長によって全然違うんですよね，内容が．

川村：最近 NHK でひきこもり先生という番組が放送されていたのですが．

藤井：はいはい，みました．一回見逃したけど．

川村：あのドラマのなかの掃除のシーンで「無言の行」と書かれたプラカードを先生が持って掃除中に歩いているシーンがあるのですが，テレビでもこう放送されるということは全国どこでも掃除は「無言の行」でやるのが当たり前なのだなと思って．掃除は喋らずやるっていう．まさに管理教育が全国に行き届いているのだなと思いました．

藤井：黙働ですね．

原田：黙働ってなに？

川村：しゃべらず掃除するっていう．

藤井：喋っちゃいけないんです一切．

村瀬：集中させるというかね．

藤井：そもそも生徒に掃除させるっていうことが，ほぼ日本だけで．他の国は業者がやってるのに．

川村：ひきこもり先生のドラマは個人的におもしろいなと思っています．学校に無理にこさせなくてもいいっていう，教育機会確保法っていうのができてからなのか，それこそフリースクールとか学校の外で学ぶ機会があるのであれば，そちらでもというようなものができましたよね．それを受けてなのか，ドラマでは問題を抱えている生徒に対して，「辛い時は無理に学校に行かなくてもいいんだ」って，先生役の佐藤二朗が叫んでいるシーンが出てきます．けれどもそれを校長が，「先生が学校に来なくていいというのは問題発言だ」，「有り得ない」と怒っているんです．多分あれは教育機会確保法を受けて変わっていこうとしている状況と，一方で変わらない現実の学校現場をあらわしているんだなって感じました．NHK でも，ここまではっきり，先生が「学校に来なくてもいいんだ」って言えるシーンが作れるんだっていうところに学校も変わってきているなと思っていたのに，掃除は黙道で変わらないんだ，と思って．

藤井：校則で決まっているわけじゃないんだから．きれいになればいいんだから掃除なんか．本当に学校の先生ってズレてて「掃除時間の間は掃除しなさい」なんですよ．綺麗になったら早く

終わってもいいし，きれいになってないなら時間過ぎてでもやらなきゃいけないじゃないですか，普通は．それなのに，掃除の時間の中で黙っとけばいいみたいなね．本末転倒なことが多くて．

村瀬：従順にね．

藤井：基本，労働者養成ですからね．

原田：学校はそんなものだよ．労働者養成所だよね．

藤井：元々学校，近代学校の成立がそうだからね．

原田：それってやっぱりヨーロッパでもそうだよね？

藤井：ベル・ランカスターなど，いわゆるモニトリアルシステムとかね．大量生産でいかに有能な労働者を育てるかというね．遅刻指導などというのは，フォーディズムのベルトコンベアのためですよね．一人でも遅れたらベルトコンベアが動かせないから．

原田：そういう労働者を育成していますからね．いわゆるモノづくりはヒトづくりというスローガンの下でね．

藤井：そうそう．

原田：実際は，そんなやり方は時代とはずれてきてる．

藤井：社会全体と学校がずれてるね．

【職業と学校】

原田：ズレてます．このズレを認識できたところで，ドイツの話しに戻します．ドイツのマイスター制度が成立した社会的な背景はいろいろあるでしょうけど，手に職をつけるっていうのが重要なんでしょう．日本だと職業系の学校とかどんどん潰れていく時代です．今でも商業科を始め減ってきています．

藤井：総合学科に変わってきていますね．

原田：親も普通高校へ行くことを望んでいるのかもしれないけど，学校のヒエラルキーがあると思います．職業学校に行くと，大学にはいけないとか，高校受験で失敗したっていう感じで捉えられるのかな．ドイツだと，手に職をつければ，賃金がたくさんもらえることが約束されているということでしょうかね．

藤井：職人とかに対する尊敬ってものはやっぱりあるんですよね．社会として日本とか韓国って大学がトップというのが似てて，若者の自殺率もどちらも高くて，大学進学率が高いというのもすごく似ている．それはやっぱりそういう文化的背景があるんだろうなと思います．知り合いの名古屋大学の技官の人がチリで電波望遠鏡を作るのにかかわったんですね．町工場の人とチーム組んで．町工場の人といっしょに作ってるんだって言ったら，韓国の大学の先生たちは「町工場の労働者と同じ席に着けるか」って言ったと教えてくれましたね．高学歴は偉いっていうような世界がありますね．日本そこまではっきりしてないんですけれどもやっぱりありますよね．

原田：何よりも大卒が大切という一つの価値観が根付いていますし，親も必死になりますから．そういう価値観が無理なく変わるような方法はないでしょうかね．

村瀬：この前，美濃加茂市にある「岐阜県立国際たくみアカデミー」を取材しまして．電気工事士とか集合住宅の建築士とかを養成する，行政が運営している職業訓練校なんですが．そこに取材に行かせて頂いた時に，これまでは職業訓練校卒っていうのがすごく下に見られて，入学者数が定員を割ることが非常に多かったらしいんですけれども，今回コロナのことがあって，3 年，最短で 2 年で資格も取れて，就職も 100 %なら県立の職業訓練校に進んだほうがすぐ働くことができると．中卒の枠もあるのでそれこそ高校に魅力を感じないとか，ちょっと財政的に難しいっていうようなことがあれば，そういう子が入ってきてるとか．2 年 3 年でも現場に直結する資格がとれるというところを重視して来る人が増えて，増員したんですよ，入学者数を．

原田：そういう流れもあるわけですね．

村瀬：一つはコロナによって，とにかく手に職をつける，自立をするっていうことに家庭とか社会全体が気づいたってのが大きいんだと思うんですけれども．働いていかなきゃいけないっていう，ほとんどの人が直面する状況の中で，職業訓練校としてどういうアピールをして，学校としてどう生き残っていくかを考えていかなきゃいけないと採用担当の方が言われていましたね．とにかく早く就職ができる．そのためにどうしても必要な 4 年間を求める子もいれば，訓練校での 2 年という最速で資格を取っていくっていう．今の 10 代，20 代は合理的で，現実的な選択をする印象なので，コロナで少し流れが変わってきたのかなって感じはしました．

原田：このコロナの時代，あるいはアフターコロナってよく分かんないところあるんですけれども，新しい流れが生まれるといいですね．例えば，知多半島，日本福祉大学がある知多半島とか，昔から木綿とか焼き物とか伝統的な産業がありますが，岐阜地域もそうだけど，アパレルをまだ細々とやってるところもあるんですよ．そういう工場に見学に行くと，すごい立派な機械が並んでいるんですよ．しかし，跡継ぎいないからもうやめるって言うんですよね．仕事はたくさんあるんですけれどもね．ただ，デザインを学んだりする専門学校はたくさんあります．そこで学んだ技術を活かされていない．服作るのは同じだと思うんだけど．そういうのもちょっとミスマッチが起こっているところはあるのかなって思ったりしています．全体的にズレています．どうしてドイツは上手くいっているのでしょうかね．

藤井：何か若い人達って，日本がちょっとズレてるのでよくわかんないんですけれども，要するに気候危機とかで知られているグレタ・トゥーンベリさんとかすごい動いてて，化石燃料を出すものや石油由来のものは使わないでとかいうような方法になってて，ちょうどうちの子がスイスの大学院にいっているんですけれども，持続可能な社会をつくるっていうような研究をやってて，わりとそういうことに関心を持つ人が，若い人の中で増えてきてるんですよね．そう考えると名古屋モード学園なども，有名デザイナーになってお金を稼ぐというだけじゃなくて，いかに環境破壊をしない生地を使うかとか，そういう方向性もあっていいと思うんです．世界的の若い人は徐々にそういう方向に関心が向いてると思うんですけれども．日本って気候変動のデモとかでもほとんどの参加しないし，それちょっと世界からするとずれている．逆にいうと世界を見ると希望はあるのかなって思うんですよ．日本だけじゃないですが，特に格差が開いてて小さいときから子どもが将来食べていけるかということを心配し過ぎていて，習い事が本当に多いんですよね．小さい頃から勉強させたりして，中学受験が広がってたりとか．いわゆる「教育虐待」みたいなものが出てきていて，子どもが，ちいさいときから充足して暮らしてきていない．少子化しているから公園に行っても遊ぶ友達がいない，皆習い事に行ってるから自分で好きなことができない．それこそ友だちと喧嘩したりしながら人間関係を学んでいたりとかでなくて，常に大人の管理の下で勉強したりとか，スポーツとか色んな事やってるじゃないですか．そういうのからすると親からも信頼されてないから常に不安だし．友だちとなんかやって楽しかったっていうのもあんまりないから．そうなると暇つぶしで「あの子を外してみない？」みたいなことになってきてるんじゃないかなという気もしています．LINE とかで外したりとか．だから学校だけの問題じゃなくてもう乳児期からの育ちですね．「生きてて楽しい」みたいなのが少ない．不安だしお手軽だから，仲間外しとかいう方向に行ってしまう．そうなってきているんじゃないかなと思うことがあります．

原田：生きていく上での楽しみですね．子どもだけではなく，大人を見渡しても，楽しく生きている人は少ないです．

藤井：いじめだけに焦点に当ててもダメで，本当に子どもが生きてて楽しいって思えるようなことをちいさい頃から積み重ねていかないといけないと思うんですけれども，それがなかなかできてないし，学校の中でも，いかにいじめを起こさないかっていう予防策になってるじゃないですか．何したら楽しいんだろうこみたい話にはなっていかなくて．

原田：そういう楽しいと思う先に，自分の才能が隠れてることも少なくないですね．

藤井：学校の行事も学校や先生がお膳立てしてもうあらかた決まってるじゃないですか．だから自分たちで色々考えたり，あれやったりこれやったり失敗したり成功したりってのがないというか．そんなことをやってると多分いじめなんかやってる暇はないと思います．

原田：確かにその通りですね．

藤井：ルールを守らないから入れてやんないとかルール守るなら来てもいいっていう世界じゃないですもんね．いじめそのものが目的になってる．だれかをハズして仲間であることを確認することが目的なってる．我々の子どもの頃はルールを守らないから入れてやらないというのはよくあった．けれども，本当に社会全体，子どもの頃からの家庭環境も含めて勝ち組・負け組になってて，生きていけない不安とか，この子どもが将来生きていけないんじゃないかという不安が過剰に親にもあって．

川村：そう考えると中国の農民工（出稼ぎ労働者）たちはのびのびと生きていますよね．

原田：農民工とは，中国の貧乏人だけれどもね．みんな元気に生きていますよ．

川村：学校が全く進路指導をしないんですよ．中学校3年生に，あと2ヶ月後に卒業っていうタイミングで進路に関するヒアリングをさせてもらったのですが，誰も卒業後の進路が決まっていなくて．始めの二，三人は進路が決まっていないって言っていても，そういう子もいるよなって思っていたら，なんとみんな決まっていなくて．卒業まであと2ヶ月なんだし，「なにか候補はあるでしょ？」って聞いていたら，それもないって言うんですよね．ヒアリングしているこっちが焦ってきて．「どうするの」って聞き続けたら，「何でそんなに2か月後のことを聞くのか」と，「人生2か月後の進路でそんな変わらないよ」って学生に言われました．まあそうなんだけどと思いながらも，その余裕は自分にはないなと思って．日本だったら高校に進学しないという選択肢は少数ですし，劣等感感じて生きてくような感じ，雰囲気になるんでしょうけど，全くそういうのがないんですよね．なんとかなるでしょってね．でもその中国の学生たちは，2ヶ月後の進路決まってないけれども，将来何になりたいかは明確に決まってるんですよね．そのために取り

組む事はほかにあると考えているようです．それに何とでもなるでしょうという感覚でいるんですよね．

村瀬：どうしても日本だとね，高校入学が一番初めのスタートになりますね．

川村：失敗したら終わりみたいな感じがありますよね．

【子どもの情報】

藤井：いじめの話に戻るんだけれども，子ども同士がお互いのこと知らなさすぎるんですよね．学校って個人情報保護法とプライバシーとかいってあんまり深く入っていかないですよね．昔に比べて．だからさっき教師のサラリーマン化と同じかもしれないんだけども，ドイツの先生と対話したときに，とにかく移民とか難民が多いところなんですよ．日本と違って憲法の主語が，「全て国民」ではなくて、「全て」なんですね．だから，移民や難民でもすべての子どもの教育を受ける権利を保障しなければならない．日本の憲法も元々は英語で作られていて people, all the people だったから「人々全て」のはずだったんですけれどね．ドイツでは移民でもなんでも子どもが来たら必ず国は教育をする義務があるんですよ．だから移民も難民も必ず学校に来させなくてはいけない．全くドイツ語をしゃべれなくて一週間前にドイツに来ましたっていう子も，そこのクラスにいるんですよ．で，ドイツ語クラスという「第二外国語としてのドイツ語」を学ぶクラスがあって，ほかの教科もぜんぶそこで学ぶんですが，そこに必ず１年行かないといけない．そこの先生は家庭の状況をとてもよく知ってるんですよ．子どものことだけではなく，親のことも．ある子が，どういう経緯でドイツに入って，どういう悲しみを持ってウクライナから来たか．その子は友だちとどうしても別れたくなかったのにドイツにきた．ドイツに来たくなかったからドイツ語を拒否してるんだとか．知ってるからどう働きかけていいかがわかるわけです．それで，途中からその先生に心開いて随分変わり，ハウプトシューレを前身とする学校だったわけですが，レアルシューレに変わっていったんですね．やればできるんですよ．日本の教師は，そういうのあまり知らないんですよね．教師も子どもや家庭のことを知らない，子ども同士もそういう会話をしないからお互いのことを知らない．我々の頃は子ども同士の時によく行き来したから，この家はお金持ちだなとか，ここは苦労しているなとか，子どもなりにある程度わかってて，金持ちの子どもの家に行って百科事典を買ってもらうお金があるとか．そういうの全然知らないじゃないですか．だから，ささいなことで簡単にいじめちゃうし，わけわかんないやつだってなっちゃいがちなんですよ．だけど，ああいう行動するのも親同士が仲悪いから仕方ないじゃんとか，ある程度子ども同士も考える．それができてないんですよね．それすごく大きいなと思って．その辺も少し突っ込んで教育も考えていかないと，安直に子どもの前でプライバシーを話せばよいという話ではいが，お互いにもっと深く知れるような機会って学校の中で作ってかないと，いじめ

対策をいくらやってもうまくいきづらいですよね．何が楽しいのか，何が悲しいのかとか，あの子の悲しみとか分かってないと．発達障害の子っていじめられやすいと言われていますが，「あいつ苦労してる」ってわからないと，やっぱりいじめにいってしまいがちじゃないですか．変なやつみたいな．それって大きいかなと思いますね．

原田：同じクラスの子とか 40 人とか 50 人とか，1 クラスでいたけれども，どういう家族構成だったとか分かってたもんね．何人兄弟とか．

藤井：親のうちの一人が死んだりすると，〇〇ちゃんは大変だから助けてあげてねとか親に言われてましたよね．たぶんそういうのがほとんどない状況なのかなって．

村瀬：自分が教員になった時はとにかく子どものことを知ろうとか，子どもとか，お父さんとかお母さんとか何か機会があれば話したいとかいうのがあって．風邪で 1 日休んだらそれこそ家庭訪問行って届けに行く．届けるのは紙一枚なんだけれども，パッと会ったお母さんとかお父さんと話してちょっと情報を得るとか，自分の顔を知ってもらうとか．それが実はさっきの教員の雰囲気の話じゃないですけれども，一人がそういうことをするとみんなそうしなきゃいけない，先生達が例えば学年 4 人いて，私は初任だったのでなるべくそういう機会を作りたい，地域の清掃とかもちょっと顔を出して行ったらいろんな話が聞けるとか思うようにしても，それはあなたがするとみんなそうしなきゃいけない．他の先生はしてないという見方になっちゃうんですよね．教員間の中だとそういうのが続くと．私は普通に続けましたけれどもね．そういう事ってしちゃいけないんだとか変に学んで何もしないでおこうとか．ますます子どものことわかんないし，親と教員間の関係がないとか，非常に変な力が働くというか．

藤井：教員間だけの問題じゃないですよね．保護者のクレームって何であのクラスの先生は学級通信を毎日出してくれるのに，うちのクラスは週に一回しか出ないのとかなってきてますね．不公平だ，と保護者からクレームが来るんですよね．でもすべての教師に毎日出せとも言えないじゃないですか．そうするとたとえば，「週に一回しか出してはいけない」とか低い方に低い方に合わせて決めていくことになるんですよね．

村瀬：そうですね．だんだんそれが義務や目的みたいになってきて，そこで本当は自然にできていたことがだんだんだんだん嫌になってきちゃっていったりとかして．そういうのもありますね．

藤井：笑っちゃうんだけれどもね，学級通信とか何かなんのためだかよくわかんなくて，結構写真を撮って写真を載せてみたないことが占めてて，文章はちょろっととかね．ただし，写真にのる回数は全員同じにしないとって．

村瀬：それありますね．

藤井：そんなことばっかり気を使ってて，学級通信を通して子ども同士お互い知ることが大事でしょうとか，保護者に学校の様子を知ってもらうとかそういう目的がどこか行っちゃって．子どもを同じ回数載せているかとかチェックしたりとかに一生懸命になってる．

原田：大変な時代だね．川村さんがよく言ってるんだけど，大学生にあの子今日休みだけど，「理由知ってる？」といつも一緒にいる学生に聞くと，知らないっていいますね．

川村：そうなんですよね．「いや友だちじゃないよ」とか平気でいいますもんね．いつも一緒にいるのにどういう事って思っちゃいます．

村瀬：そうなんだあ．

川村：隠すってことに戻るんですが，私が持っているクラスで問題行動を起こした子がいたんですけれども，その子がある日突然何日か連続で学校を休み始めたんです．どうしたんだろうなと思って何の気なしに「最近〇〇さんはどうしたのかな」って生徒に聞いたら，「え，先生 知らないの？」って言わたんです．「知らない知らない，何かあったの？」と言うと，生徒が事の顛末を話してくれました．ここ最近いろんな先生たちと話していても，その子に関しては何も言われていなくて．え，話してよってなりますよね．結局違う学校にいったようですが．それもまたその学生に関する情報は隠して，転校させたようです．新しい学校も何も知らないことになりますよね．情報を隠すのは受け入れてくれないからか，一からやり直してって思いもあるんでしょうけれども，全て隠されるとやりにくいですよね．

村瀬：そうですよね．その子のプラスになるかどうかっていう視点がないですよね．何かあったら全部もう終わりみたいな．すごい教育現場の中で強いというか，一個間違いをしてしまったらもう全体的な雰囲気，この子はもうダメだみたいな．ちっちゃい年齢からそういう雰囲気があって，それが結果的に高校入試とか大学入試とかそれこそ社会人になって１年目２年目でやっぱり合わないってなったら，やっぱり駄目だったとかなる．それでその本人が自分が思ってる以上に自分の肯定感とかを下げてしまって，社会に出るのも嫌だし，じゃあもう引きこもりとかニートになってしまうっていうのが多いなーって思いますね．

藤井：少年法が厳罰化されて失敗したらもう終わりみたいなね，社会全体がそうなってるじゃないですか．子どもって間違えるものだから間違ったところで何を学ぶのかってのが大事なのに，間違ったらもう終わりみたいな社会になってて．犯罪だけど未熟だし可塑性もあるから更生でき

るよねっていうのが前提だったのにどんどんどん厳しくなっていくような社会になってきていて．

原田：自分の首絞めているだけだね．

藤井：子どもの権利擁護委員というのをやってますけれども，子ども権利条約があるじゃないですか．今までの条約と何が違うかっていうと，子どもは参加の主体だ，子どもは権利行使主体だと捉えていて，たとえば集会結社の自由が子どもにあるっていうことなんですよね．意見表明権があるというのが有名ですが．だけど同時に保護もしなきゃいけないっていう．子どもは参加する権利もあるし間違えることもあるから保護もしなきゃいけないっていう両方の面を持ってるんですよね．ところが日本は権利行使を認めてないこと多いですよね．校則とかでも意見表明権がないじゃないですか．子どもの権利条約って条約ですから，それは法的には憲法の下，国内法より上なんですよ．だけど日本政府があまり守る気があるとは思えなくて．国会の答弁でも，批准する時とか外務省の答弁でも，これは校則とかでもね，学校が必要だと思ったら子どもの権利を制限してもいいって答弁してますからね．じゃあ批准するなよと思いますね．国際的に批准してますよというポーズをするためだけに批准して，実際にはやらないっていうのが多い気がします．

原田：そういう構図はたくさんありますね．批准はしているけど，実際の社会や現場では違う原理が働いているケースですね．ただ，教員を目指す若者は，子ども権利条約を知っていても，現場の原理を理解していないケースは少ないでしょうね．

村瀬：教育実習してる子ってすごいキラキラしてるんですよ．思いがあって．自分が大学で教えてもらったことをやってみたとか，4週間の間に．その時の現場の先生のレスポンスが悪すぎる．「やってみてどうだった」と聞くと，何も言われなかったです，と答える学生が結構います．大学で学んだことを実践して，それに対して先生が，現場の先生が何かいってくれて初めて，これ使えるとか，これは大学で学んだけど現場で使うのは難しいかなとか，そこでわかるじゃないですか．大学の学びと現場で使えるかのすり合わせみたいなもの．それすら何も言ってきてくれないから．やってもいいかわからないし，やって言われるんだったらじゃあやらないっていう風になっちゃう．現場の先生にかかってますよね．

藤井：そうなんですよね．卒論とかいいこと書いてるのに，現場に入った途端に「思想改造」されてるっていうね．

村瀬：もったいない．

藤井：実習生には思いがあっても，指導教員の言うままに授業を行って，本人は納得せずに帰っ

てきた時，その指導教員からね，「現場に行って嘘ついたのね」「本心じゃないことを教えてきたんだね」ってなる．

原田：なんともないと思って続けるか，辞めるかってなっちゃうんだろうね．

藤井：はぐらかしながらも，ちょこちょこ自分のやり方を出してみるとか色々あるじゃないですか．器用じゃないとできないですよね．

村瀬：器用じゃないとね．

藤井：僕も教え子でやめた子は，初任研修の時に指導についた先生と意見が合わずにとかね．自由にさせたいのにすごい管理しろって言われてということがあって辞めましたね．

原田：学校組織のなかで，働くことは難しいというのは分かりますが，教員を取り巻く環境は，それだけではないでしょう．やはり親の存在も大きいですよね．

藤井：子どもの言い分でなく，自分の言い分で，学校をねじ伏せてやらないと気が済まないという親もよく見るようになりましたね．だから子どもは謝ってくれれば，場合によっては，謝ってくれなくても，自分が登校しやすい環境をつくってくれればいいとと言っているのに，親のほうが「学校が謝るまで学校いかせません」みたいことがありますね．親自身が自分の生活に満足していないというか．こういうところで勝つことで自分を認めさせたいっていうのがあるように思います．

村瀬：普段この立場で活動されているときは電話相談？

藤井：電話相談員は調査相談員っていう人が 10 人いて，そのひとたちが全部やってる．面談も．年間 2000 回くらい相談があるんですけど，それをパソコンで全部書きおこすんですが，それを全部読んで，全件ケース会議しています．現在は，弁護士 2 人と心理学者と児童福祉の研究者と私の 5 人，調査捜査員 10 人の合わせて 15 人で，週に 1 回朝から晩まで．全件ケース会議します．

村瀬：いやすごいですね．

藤井：そう，でもそれでも足りないっていうか，名古屋市の規模で一箇所で，絶対無理だなって思いますよ．人口規模で言うとたぶん日本で一番大きいんじゃないかな．東京世田谷区にあるんですけど，区だけなので．子どもが異議申し立てをして，それを踏まえて勧告とか色々権限持っ

てる子ども権利擁護機関があるの自治体は30数か所箇所ですね．それを増やすために活動している人もいるんですけれども．擁護委員の人は，私とは異なる分野の方々なので，私のように学校だけではない多様なケースについて豊富な知識と経験をお持ちで，すごく勉強になりますね．

村瀬：なんかこう思いますけれども，学校の先生って本当に学校の話しか知らないじゃないですか．学校の中での話とかしか．岐阜のいじめ事案とかこの2年間でもっときっかけにできたらと思ったんですけれども．もっと法律とか警察関係とか学ぶ機会にすべきだと思ったんですよね．学校の中でできないことをいかに外の専門家と改善していくか．自分たち一学校の中でのことだとクローズにするのではなくて，法律とかいろんな事案を見てきた人たちに頼る部分は頼って入ってもらうとか，そういう風に外に外に目が向けられるようにすれば良かったと思うんですけれども．結局内輪での話で終わっちゃったんでね．今後，法律とか警察関係とかそういう立場にある人を学校の中に巻き込んでいかないと，現場はパンクするんじゃないかなって．

藤井：基本的に我々が子どもから話を聞かないと学校に入っていかないんですよ．子どもがこういう風にしてほしいってのがないと．親が何と言おうと親と学校がもめていても．子どもに目を向けてあげると割と問題が解決して，学校から「来てもらって良かった」というのがあるんですよね．

村瀬：なるほどー．

藤井：名古屋市の条例があるので，市の機関だから公立学校だったらガンガン行けるんですけれども，私立はなかなか難しいところがありますね．

村瀬：やっぱり市立と私立って全然違いますもんね．

川村：ちがいますよね．

藤井：条例の建て付けが，市の機関に対しては調査権限があるのですが，それ以外は「協力を求めることができる」となっているのですよね．市立の学校も含めて市の機関への勧告ができるのですが，それ以外，つまり私立学校には要請しかできない．やっぱり建て付けが違っていて．名古屋市の特徴は独立性が高いことですね．市長の付属機関なんですけれども，市長からも独立しているので，市長に勧告すら出せるんですよ．

村瀬・川村：へー．

村瀬：やっぱり立ち位置がしっかりしてるんですね．

藤井：全国の失敗を踏まえてますからね．岐阜で言えば，多治見市ではゴタゴタがあったようです．市や市長に不利なことを言う擁護委員は任用更新されないとかにならないようにいろんなこと考えて，参与っていう役職をおいて，その方が独立性についてチェックする仕組みになっています．子ども権利の研究で著名な関東地方の研究者に参与になってもらってるんですけれどもね．常に警戒してないといつ介入があるかわかりませんから．市長がやれと言っても私たちは独立をしてるから，私たちが必要だと思えばやるけど，市長の言葉で動くことはありません．

村瀬：どういうシステム，組織のあり方がいいのかっていうのは，本当にいろいろ思いますよね．岐阜市の事案を思いますとね．

藤井：子どもの権利条約ってのもなかなか難しいんですけれどもね．よく名古屋できたなって思っていて．結構子どもの権利って言うと「わがままになる」というレベルでものを言う議員も多いので，よくこの条例が通ったなって思ってるんですけれどもね．

【あまごクラブの試み】

原田：確かに，保守的で，管理教育のふるさととまで言われている名古屋でよく通りましたね．名古屋市がどこまでできるのか，注目して行きたい点ですが，やはり行政だけで教育問題の多くが解決できるとは思えないですし，過度の期待をかけてもどうかなとは思います．ただし，民間の可能性は決して小さくないと捉えています．この管理社会のなかで，どのように生きていけばよいのか？ この問題に関連していえば，村瀬さんが，最近始められた「あまごクラブ」の活動は面白いと受け止めています．この活動についてお話しいただけませんか．

村瀬：旦那さんが岩手の人なんですが，郡上に移住して，私が熱く教育についての話をする中で，一つの形にしようと．それでフリースクールを立ち上げたわけです．

川村：何人いま通われているんですか？

村瀬：いま 2 人．一人は郡上，もう一人は名古屋．名古屋とかでもいろいろきいていると，窮屈なんだなって．

川村：ホームページを見るとあまごクラブで行う活動の内容に，瞑想とか散歩とか考え事とか書いてありましたよね．そういう時間がとられているのはいいなと思いました．

村瀬：はい．フリースクールというもの自体は岐阜市を中心にちらほらとできてきました．けれど，岐阜市だけの話ではなくて．きっかけはやっぱりいじめ事案のことがあったり，取材をしていて感じることがたくさんあって．

原田：体験に基づいているわけですね．

村瀬：はい．教員をしていた時はどちらかというと不登校になる子どもの方が弱いっていう風に思っていた．現場にいる時は．学校に行きたくないなんてどういうことだろうとね．

原田：楽しい所になって欲しいですね．

村瀬：そうなんですよ．私が何とかしてあげるっていうような自信はあった．教員の時はありましたけれども，でもやっぱり全然違う立場で客観的な立場で取材していると，いろんな人の話を聞くことができるわけで．今，不登校支援ってこんなに問題問題って言われてるんですけれども，一回学校抜けてそういう居場所的な場所に入ったとしても，結局 3 年間稼ぎでしかなくって．中学校行けなかった，じゃあ 3 年間はフリースクールにしましょうとか．じゃあ出て終わりましたと，高校どうする，じゃあ通信制行くかと言って通ったところで続かないのがほとんどなんですよね．

原田：そうなんだ．

村瀬：でもそれって子どもの話を聞いてるとすぐ分かるんですけれども，中身を全然知らない目的もない，けど入った，それは続かんだろうっていうのが現状としてあって，だからもし自分が何かできることがあるとするならば，その中学を卒業する時点で，なんとなく先の中国なんかじゃないですけれども，その時点でまだわかんないけれども，やりたい仕事があるとか，こうなりたいことがあるとか，そういうのを作ってあげるために，学校以外の居場所で探してあげるっていうのは大事だと思ったんですよね．ただただ時間稼ぎじゃなくって．だから学校から離れるんだったら，そのぶんその学校で高校，大学行っている間の時間の分，早く社会にでさせてあげられるようなシステムとか手に仕事つけられるとかそういった場所があった方がいいんじゃないかっていうのが一つ．もう一つが，この地域性なものがあるんですけれど，どうしても名古屋市や岐阜市，大都市圏だと企業に入ることがやっぱり社会の第一歩じゃないですか．郡上八幡だと地域性のものもあってか，自営業が非常に多い．若者も「やりたいことを知って，それで死なずに生きていく」生き方や働き方に魅力を感じてきていて，彼らについていうと，その月収何万とかそういうことを自分の幸せにしてない人が多いですよね．自分の生活としてこれさえあれば後はとにかく豊かに過ごせるとか，人とのつながりを大事にしたいとか，何かに挑戦できるとか，それを

みんながそう思ってる地域だからこそ，会社勤めしていることがいいっていう捉え方を大人が持っていない．だからここでやれるんであれば，なるべく早く 自立できるような道筋だったりとか，憧れの大人に出会わせてあげたいっていうのがすごくあって．私取材で川村先生と話している時にすごい思ったのは，高校の先生って子どもらが出会う最後の大人達だと思うんですよね．そういう時，昔は小中高の間になんとなく憧れる人だったりとか，それこそ自分もそうですけれども，こうやって先生になりたいいとか，夢に繋がる，リンクした．でも今，ここまでの流れでもありましたけれども，全然先生が個性が無い．個性がない人もいれば個性があるのに．それが潰れていくような学校現場なので，憧れない大人になってる．で社会に放り出されると，そこから自分の夢を見つけるっていうのはやっぱりあまりにも難しくて，子どもたちにしたら．だったらいろんな人にまず出会わせて，経験とか体験をさせてあげたいってのが作りたいっていうのでひとつ，フリースクールを，自宅でですね．

藤井：難しいんですよね．最初から学校に行けるんだけれども，フリースクールを選んでくるっていう子がいればいいんですけれども，それは自分の存在そのものを否定されて，自信がない状態の子しか来れなくなると，将来何になりたいかと言われても，今自分が存在してることに自信がないので，そんなこと考えられなくなるじゃないですか．

村瀬：そこの難しさですよね．不登校支援っていう言葉だったり，フリースクールで発信はしてますけれども，一つはレスキューだと思っていて，今のどん底からちょっと救い出すっていう．後はこの自然とか人との関わりの中で一時休憩する．セラピーのような感じで．そういう在り方の中で，何とか形にならないかなって思いますけれどもね．

原田：大人の存在が大きいと思います．とくにまだ自分が確立できていないような小さい時に出会う．確かに藤井先生が言われたように，結構，自信をなくした子が多くなったのかもしれないんだけれど，自信を失くした大人が多すぎなのではないかな．中国なんかわけのわからない大人だらけだからね．

川村：本当に．どうやってでも生きていけるんだなって思いますもんね．

村瀬：あーなるほどね．

藤井：もう退職された先生だけど，割と有名な『みんなで跳んだ』っていう本があります．長縄跳び大会に軽度知的障害者の子が参加するかどうかをめぐってクラスの中で議論を始めて，2 時間ぐらい話し合った実践です．その先生は国語の先生なんだけれども，子どもにとって必要だと思う本を教科書にするんですけど，ホームレス問題が重要と思って湯浅誠さんの『どんとこい，

貧困！』っていう本を教材にしていたんです．生徒は，最初はホームレスって変な人だって，社会の脱落者みたいなふうに思ってるんですけど，調べていくと朝日新聞を取ってるホームレスがいるんですよ．なんでかっていうと，俳句や短歌の投稿コーナーがあるじゃないですか．それを読んで実際に自分も投稿してるんですよね．そういう文化的な生活の人々もいるよとか，手に職があって，河原に勝手に溶接とかして鉄筋で骨組み作って住んじゃったりとか．いろんな人がいてこうやって生きている人もいるんだよっていう話をするわけです．すると受験前の中3が夜，ホームレスにおむすびを配る夜回りのボランティアに参加したりするようになったりして．ホームレスやってても生きてるんだっていうよね．そういうのあってもいいと思うんだけれどもね．ホームレスに関しては先日も岐阜の大学生の事件もあったけれども社会の敗北者みたいなね．そういう感覚ってすごいよね．オリンピックでもどんどん排除されていて，東京から出ていっちゃってますよね．海外のメディアが取り上げてましたよね．日本では負け組はもうだめなんだみたいな感覚がある．それを変えていかないと．さっきの中国の話じゃないですけどね．ホームレスも生きていけるよってね．

原田：中国のある駅前に靴磨きのおばさんがいるんですよ．その靴磨きのおばさんは，もう20年ぐらいそこでやってるんですけれど，昔から友だちでね，知り合いが学校の経営者で，靴磨きの子どもたちもみんなその学校に通っていてね．で，駅前で目が合うとやってけって誘われるんです．もう数年前のことだけど，靴磨きをすることになって，その姿を川村先生にビデオを撮ってもらっていたんです．そしたら途中で，乞食が来て，ちょうだいちょうだいって言ってくるんだよ．それも大笑いしながらせびるんです．お金渡すと，「はっはっは」と笑いながら消えていてくんだよね．たまたま撮れたんだけど，世界一明るい乞食だと思います．日本じゃ考えられないですね．

川村：本当に．それこそ農民工学校（出稼ぎ労働者の子どもたちの学校）に来なくなる．つまり，中卒，なかには小卒の子とかもいるんですけど，お父さんの仕事を請け負いながら，商売をやっている子もいるんですけど，結構儲けていますね．その子達に商売をするうえで勉強とかってどう思うって聞くと，笑顔で「どうでもいいよ」っていう．じゃあ，何が一番大事だと思うって聞くと，「飲み会だよ」って言うんですよね．

藤井：人間関係ですか．

川村：はい，「人間関係を形成することが大事だよ」って．私も中国にいくと昼も夜も宴会に誘われるんですけど，そこで新しい人間関係が形成されると実感します．子ども達もお酒を飲まなくても宴会に出てくるんですけれども，学歴がなくても，大人をよく見て，話をよく聞いて，すごい教養を身に着けています．子どもたちも宴会でいろんな大人を見てるんですよね．

藤井：昔もそんな雰囲気あったんだろうね．いろんな人がいるっていうのがね．子どもたちに見えてないんだよね．日本がそういうのを許さない社会になってるんだよね．それこそ本当にホームレスが寝れないベンチとかね．

原田：そのためなの？

藤井：そうでしょ．排除するためでしょ．オブジェの意味でやってるけどボコボコしてるのは寝れないとか．

原田：芸術をなんだと思っているんだ．意味のない存在ものを排除しすぎですよね．街中で生きていると意味のないものを求めたくなるのに．オブジェにも意味を与えるなんて世も末ですね．

川村：若者が集まれないように，公園や広場でダンスとかが出来ないように，鏡のようなものは排除されていったなと思います．私が高校生のときによく友人たちと広場とかにある建物に姿が映る場所を探してダンスをしていました．その場所は私たち以外の人も鏡代わりにして集まっていたのですが，迷惑行為であると張り紙がされ，三角コーンが置かれ，人が入れないようになり，その後姿が映らないように壁がかえられてしまいました．あちこちそ変えられてしまったなという壁があります．

村瀬：そうだよね．

原田：ん〜．そういうことも結局，大人たちの判断なんだろうね．あまごクラブの話に戻すと，子どもがあまごクラブに行きたいなって思っても，親が意味を見出せなければ許されないということになるのでしょうね．

村瀬：そこですね．

藤井：自分は自分のままでいいんだって，さっき言われたレスキューっていうね，注意しなきゃいけないっていうのは，なるべく早くね，もう本当にズタズタになって立ち直れない状況になってからじゃないですか．もっと早い段階でレスキューしてあげると違うだろうし，そうするとその子たちが社会に出て，自分で活動しようとなれば，それは社会にとってプラスですよね．でも，引きこもってしまえば，結局それでコストが掛かるわけじゃないですか．コストだけで考えたくはないんだけど．社会設計としても間違ってるなって思うんだよね．みんなが楽しくてやってみようって社会じゃないとよくないなって思うんですけれども．なかなかそうなっていかないですね．

村瀬：今回と立ち上げの時に一番壁に感じたのは，出来ましたっていうのをまず郡上市の教育委員会とか学校の先生に届けば，学校の先生も苦しむことが減るのかなって思ったんですよ．例えば自分の学級に何人かいてどうしていいか分かんないと，その時に市内でね，こういうところがありますってもし紹介してもらえるんだったら，そこで一人，いい形で変わっていくかもしれないっていう思いがあったんですけれども．結局行政にすると民間には頼めないってですよね．おっしゃる通りでその通りだと思うんですけれども，ただ学校で変えれないから，こんだけ問題立ってるんだからなぜ，そこをもっと開かないのかなって．ま，これは絶対学校の先生とかそのためにもなると思うんですけれども．その子達たちも困って本人は困ってるし，学校の先生もこまってるんだったら，他の機関にそれを投げるっていうですかね，言葉で言うとあれですけれども，もっとこう外に開く形にすれば，どんだけでも楽になるかなって思いますけれどもね．そこはどうしても学校のことは学校でしたいみたいなものが強いなって感じましたね．

藤井：発達障害の子とかいろんな子いるじゃないですか．フリースクールに行ったほうが合っていると思える子とかね．でもね，名古屋市の子どもの権利擁護機関は市の機関なので，民間はやっぱり紹介できないんですよ．ルールとしてできないんですよ．どこを推薦してどこを推薦しないとか判別もできないし，問題があっても，責任もとれないので．だから学校でしかできないというのとは別の理由がありますよね．そうだとすると，外に開くためには，仲介するような NPO とかできて，斡旋するようなところができて，世間に知られていかないと結構厳しいですね．

原田：大人のエゴですね．というか責任負えないのは大人じゃないともいえますけど．

村瀬：社会で生きていくというのは，人との関わりの中でってのがあるから．不登校支援の話になると，学校否定，アンチ学校のような話が多いんですが，決してそういうことではないと思うんです．学校教育でやってることをそのままやっていていいと思うんですよ．ただ今日の座談会で問題として出てきたことがいいかといったら別ですけれども．教科を教えるとか，挨拶をしっかりするとか，そういう根本的，基礎的なことは学校でやるべきで，やる必要があると思うんですね．ただただみんなが人との関わりの社会の中で生きていくのが全てかっていうとそうじゃない子ってのもやっぱりいて．そういう生き方の方が幸せだったり，その子らしく生きていけるっていうか．昔より増えてるような気がするんですよ．昔もいたと思うんですけれども．でも地域の中でおそらくそれはカバーしあったり，地域のいろんな人の協力の中で働く手段っていうのがどれだけでもあったと思うんです．農業のように自然の中でやる仕事がありますけども，今の世の中は自然の仕事と街での仕事が，よりくっきり分かれてしまっている．どっちが向いているか，という二つに一つを決めさせるという示し方ではなくて，特性とか好きなことを早めに見つけてなるべくその子にあった方向に大人が向けてあげれるといいのですが．そういう立ち位置にフリースクールがなれるといいなと．

原田：本当にそうだと思いますよ．いろんな部署とか関係し合っていれば，そんなに難しい問題ではないと思いますけど．なぜか日本社会ではそれができない．日本の学校に通っていると，社会性があるようでないような人間が育ってしまうということでしょうね．

藤井：さっき教師が金太郎飴って話あったじゃないですか，学校スタンダードもそうなんだけど，子どもにも一律の行動を求めてるんですよ．子ども同士がお互いに監視しあってる．「あいつできてない」とか．昔だったら「あいつはあれだから，あそこまででもいいじゃん」っていうのが，子ども同士で暗黙のうちにあったと思うんだけれども．いまどきは，学校に名札を置いて帰るじゃないですか．歩いてる最中に名前を覚えられて，誘拐とかね，身代金とかになるとで．でも名札を置いて帰るのを忘れることってあるじゃないですか．それを子どもが「あいつ名札を入れてない」みたいな．いや別にその本人困ってないんだし，その子が入れなかったからって別に他の子は困るわけではない．何でそんなことを指摘してるんだろうなっていうのがありますよね．それがいまや，こんな規則なくても全然困らないじゃないかというのを子どもが作るんですよ．それで「あいつは守ってない」とか言って監視し合ってる．そんないらない規則作らなきゃいいじゃんって思うんですけど．本当に怖いんですよ，子ども同士の相互監視社会．

原田：最悪だね．いや本当に．

藤井：だから発達障害とか持っている子は本当に参加しにくいんですよ．

原田：いっぱい昔もいましたよ．チェックするようなことはなかったけど．

村瀬：チェック細かいですよね．先生がするチェックも厳しいけど先生がそれしてるのも見てるから，子ども達も同じようにそれをする．

原田：それがいいってことになるんだね．みんなでルールを作ってみんながルールを守っていて，守らないあなたの存在は許されないということですね．

村瀬：それを守ってない子，また先生に言ってきたくれたね．よく見てるねって．

川村：ポイントアップですよね．

村瀬：そうなんですよね．

藤井：昔は困ってる子のことやいじめを伝えてくれた子に「ありがとう」っていう話だったんで

すが，チクるような子を「よくいってきたね」っていう風になっちゃってる．

原田：チクリね．

川村：例えば喫煙とか一人見つかると芋づるでどんどん出てくる．あいつもあいつもって，友だちを売る．

藤井：売るのね．

川村：売ること，そっちも問題だと思うんですかね．

藤井：自分だけ全部かぶるぞって人はいないんだね．他の人のことを言えば自分も軽くなるって．

原田：あまりよろしくない社会ですね．

川村：一時期，喫煙関係で生徒指導部に入らないくらい指導される生徒が芋づる式で出てきたこともあります．雪が降った時にもそんなとことがあって，隣に大きな公園があるんですけれども，そこに授業を休んで雪合戦にいったということがすごく問題になったんです．その子たちの言い分としては，昼休みになったら雪が全部溶けちゃうから遊んでから登校しようと思ったって．確かに雪は溶けてしまうくらいの量だったのですが，朝学校に登校する前にその公園にいったんですよね．そしたら学校では，同じ電車に乗っていたのに，あの子たちがいないってなって．遅刻してその子たちは来たのですが，雪合戦をした子が次々と出てきて．反省文をもって，休んだ授業の先生のところを泣きながら回っていましたね．

藤井：まともな感覚があれば，「子どもの頃に十分に遊べてなかったんだな」っていうので終わるよね．そのくらいの捉え方でいいと思うんだけど．

川村：ほんとそうですよね．そのカードを複数もらうと大学入試のときに学校推薦がもらえないとか退学とか脅しもありますね．

藤井：脅しで教育してるんだよね．

村瀬：恫喝ですよね．

川村：「指定校があるのにどうして一般入試なの？」ときくと，「いや推薦がもらえないんです」っ

て生徒，結構いました．

原田：大学はそんなこと気にしないんですけど．

藤井：そうですね，気にしないですよ．

原田：本当に困ったもんだね．フリースクールの話に戻ると，もう少し民間と行政の距離が近づくべきですね．ここに問題があって駄目なんだって言うけど問題あってもいいでしょう．問題が存在してるって言う事はそういう人間がいるということを認めることで，問題がないっていうと馴染めない人間の存在そのものを否定しているような気がしますよね．

村瀬：そうですね．絶対いますもんね．そこをやっぱり風穴をあけるっていうか．不登校の子とかと繋がってくるワードの一つに，貧困があると思うんですが．例えば何か問題が生まれた時，家の余裕，親の心理的な安定，地域の目が届いている環境とかがあれば，今の状況から引っ張られるんですけれども，例えばお母さんが一人で，その子も家にずっと一人だと，それ以上，身動きが取れなくなる．だから，周りも気が付けないから状況はどんどん深刻になって，親子で苦しむ．あまごクラブとして動くようになって，結構聞こえてくるのは貧困の話なんですよ．

藤井：そうなんだ．

村瀬：最近社会福祉協議会の方と話していて，不登校っていう，さっき藤井先生がいわれたように本人がやっぱり学校に行きたくないっていう，意思的なものがあるのと，ただただ学校に行けない理由が家の中にあったりとか，それが結構ごちゃまぜになっていて．不登校って括られていますけれども，家の中にもう少し余裕があったり，それこそ私立行かせる余裕あったりとか，別の道を見つけてあげることができるんですけれども．家にそういう力がないと，結局ずっと家にいることが普通になっちゃってるとかして．で，どこにも通わせることができないとか．福祉的なサポートが必要なんじゃないかなっていうのは思いますね．

原田：なるほど，つなぐところね．

村瀬：つなぐところですね．

藤井： 不登校の話だと，僕は「非行と向き合う親たちの会」っていうのに関わってたんですど，結局そこに集まってくる親は非行まずいと思ってる親なんですよね．親も非行に走っていて，未だに暴走族やってる親とかは来ないですよね．不登校の子の親の会って結構活発じゃないですか．

でも結構ゆとりがある人がそこに来て，本当に生活するのにカツカツな親はそこに来れないように思うんですよね．そうすると親に関心や余裕がないところの子どもは繋がりにくいっていう問題があって．学校は子どもが来ないんだっていう情報を持っているわけだから，ちゃんとつかめるじゃないですか．それもあるし，それこそ子どもの電話相談みたいなところで子どもから直接かけて相談できるところがないと繋がれない．子どもと繋がらない．親が関心があるところとは繋がれても，親が関心がないところは繋がれないっていう問題が出てきますよね．誰かキャッチしてるかってね．伝えていくのかっていうのは凄い重大な課題ですよね．

原田：親次第ってことですね．

藤井：いまは親次第になりがち．

原田：それが大きな問題ってことだね．

藤井：そう．親が，我が子が不登校だからフリースクールに入れたいって思ってくれれば，その子は繋がれるじゃないですか．親が思ってない家庭はつながらない．親が子どもに無関心だったりとか，それこそネグレクトだったりとかね．あるよね．

原田：そうすると第三者のようなものが入ってこないとわからない．

村瀬：わからない．

原田：わからないけど本当は学校にはすごい情報があるはずなのに，その情報は入ってこない．

村瀬：こない．

原田：動きようがないってことですね．

村瀬：それが立ち上げてすごい感じたものですね，今回．

原田：苦しんでいる子どもの存在は分かってるのにね．

村瀬：わかってる！　何十人いるかいう事をつかめている．

原田：なのにそこに届かない．

村瀬：届かない！っていうのが初めてこう今の問題が見えてきたっていうか．ある意味立ち上げつつもラボラトリーじゃないですけど，研究をさせてもらってるような感覚ですけどね．

原田：つながれば，すごい可能性が広がるのにね．

村瀬：そう．さっき出たこの地域で自営業者というか職人が多いっていう場所でやるっていうのはその多様な生き方でしょうかね．

原田：何か楽しいもの見つけてくれればいいんだもんね．

村瀬：そうですね．大きな企業と違って家業とかでこぢんまりと小規模でやられてるところばかりなので，見習いみたいな形で入りやすい．

原田：徒弟制ですね．

村瀬：そう．大学のインターンシップもコロナの中で色々言われてますけれども，大企業にこれから何かしようっていう子が入っていくのは結構ハードルが高いものですよね．求められるものがいっぱいあって．だからこぢんまりとしたところに，一人二人っていうのが入るとよりすぐ分かるし，全体がつかめるし，関係作りができることなんですよね．徒弟ですね．

川村：中国では徒弟制はまだまだたくさんありますし，多くの子どもたちも徒弟の道を選択していきます．

村瀬：へー．

原田：昔は，貧乏な家庭の子どもたちが徒弟になっていたけど，最近は，給料もらえる職場もあるから．

藤井：次男三男ね．長男だけが相続だったから田畑がもらえないとかね．

原田：徒弟の良いところは，例えば農民工の子ども達も徒弟に入ったりするけれど，そうすると例えば流行りもあるんですけれども，女の子なんかだったら美容師になりたいと行くじゃないですか．でも美容師としての才能がない子どももいるんですよ．すぐ分かるんです．そうするとすぐに横の店に行くとか．もう美容師辞めてケーキ屋行こうとか．これもダメだったら次の職を探そうと．

藤井：色んな所に試しにいけるんだね．

原田：そうです．お試しができます．さらに徒弟だから最終的には自分の店を出すっていうのが大きな目的になってるんだけれど，ただ，途中で気付くこともあるんです．修理屋でバイクとか自転車とかすごい好きでも，自分は経営者の能力はないっていって．それでこのままでもいいとなる．経営の才能を見極めることができます．もともとドイツも，マイスターとは，そういうものだと理解してます．

藤井：みんなが親方になれるわけではないでしょうね．

原田：それを制度化したのがインターンシップとかですよね．徒弟というか，若い時に，いろいろ自分の才能を試すことができる社会はいいと思いますね．逃げ道じゃなくて，生き方を探すための道がたくさんある方がいいと思います．

村瀬：そう，そうですね．

川村：本当に勉強ができないと，この子たちの人生は終わったみたいな扱いしますもんね．学校でも勉強ができないと，どうしようもない子たちみたいな扱いをされていますね．私の勤める学校の生徒は愛嬌がある子たちが多いと思っているのですが，評価基準は勉強をするか，教師の言うことを聞く子かという点にあるかのように思えます．勉強は学校を卒業したあとでも，自分が必要だと思ったら，もしくは興味があることを見つけたら，自分で努力をして基礎とかいくらでも作ってくいと思うんですけれど．測る物差しが勉強だけですよね．

原田：学校を出てないとやっぱりコンプレックスってあるものなんですかね？ この日本社会って．皆さんも大学出られてますけれども．

藤井：まだでも半分ちょいでしょう？ 大卒って．

原田：僕らの時は30%ぐらいだったよね．

藤井：そうですね．

川村：私の勤めている高校の子達はコンプレックス抱えていますね．大学に行かない子は結構いますが．「それはできない，俺ら〇〇高校だよ」，「〇〇高校レベルで話して」とよくいいます．

村瀬：言うんだあ．中学校の先生とか聞いているのは大人の話ですよね，きっと．そこはまだ諦める年齢じゃないですけどもね．

川村：勉強ができないことで，大学に行かないことで，すごいコンプレックス抱えている気がしますね．俺は就職だからって．いいやんって思うんですけど，劣等感を感じていますね．

藤井：エリートが本当に幸せになってるかっていったら検証してないよね．

原田：絶対なってないよ．

藤井：うちの子の同期の子は日本の名だたる国立大を出て大手都市銀に勤めてたけど，パワハラもあったりして 2 年勤めて辞めて海外でワーホリやってますけどね．別にいい大学だから，いいって企業に入ったからそれで幸せになったかといったら，全然幸せじゃないよっていうね．何だろうな．幸せになるっていう基準が浸透してなくて，「何が幸せか」を考えなくなっているというのが結構大きくて．楽しかったらいいじゃんっていうのね．さっきのね，夕方働きすぎないでビール飲めたらいいじゃんっていう．そういう幸せ像っていうものの転換が必要ですね．給料高かったら幸せかっていう．地球環境破壊までして宇宙旅行にいくことが幸せか．

原田：子どもってそういうのを見ないと．教科書でやってもダメなんだと思う．感覚でつかむものです．これはきっと．大人を感覚でつかめるかどうか．この力が欠落してると思います．それはやっぱり体感してみないと無理だから．大人たちが郡上で本当に楽しい生き方してたらそれは面白いですよね．

川村：学校にはなかなかいないですよね，そんな面白い大人．

村瀬：そうなんですよね．

藤井：今学校がやってるのは，「夢を持って夢に向かって頑張りましょう」みたいな話ですが，講演のためとかで呼んで来る人って，たいてい成功した人なんですよね．そういう人を呼んできて，大体みんな「諦めなかったら夢は叶うんだ」みたいな話をする．「生存者バイアス」ですよね．あなたは最後まで生き残ったかもしれないけど，あなたの周りで競争に敗れて倒れていった人たちが山のようにいるよねと言いたいですね．だから学生には「挫折した人が今どうやって生きてるのかっていう方が，圧倒的多数の子ども達にとっては意味があるキャリア教育だ」と教えているんですけど．「夢をもってそれに向かって努力すれば叶う」みたいなことを学校は教えすぎだと思う．

村瀬：そうでしょうね．

川村：ほんと感じますね，失敗は聞きたがりますね．でも生き方も聞かれますね．私も高校から帰った後何してるのってよく聞かれてるんですけれど，コロナ前はいろんな人との飲み会でてるっていいます．飲み会と中国に行くために，非常勤だよって．

村瀬：休みがとれたりですよね．

川村：でも反応は，先生なのに？といわれます．

原田：先生ですよって返すしかないよ．

川村：大人の模範があるんでしょうね．でも，さっき個性がないという話がでましたが，生き生きした人はいないですね．

村瀬：そうですよね．でもなるべく早く海外は見るべきですね．考え方も違う．できれば本当に先進的なところじゃないローカルな所に行くのが，その方がいいと思う．若い時は．私もドミニカに行ってがらっと変わったので．全然生きていけるじゃんっていう．

藤井：そうか．

村瀬：ドミニカは逆に働かないけど，だからこそ家族とかの時間を大事にする意識っていうのはすごく強いので，本当に大きく物の見方，考え方，価値観が変わりました．

川村：まえ，村瀬さんがドミニカに行かれたときのお話をされていたときに，数学で何かを教えられた際に，「その計算すごい」って拍手されながら，「でも使うところがないな」って笑顔で言われたってね．

村瀬：そうそう．ありました．

藤井：うちの子が高校の時に1年間インドネシアに留学していて，そこでの高校の数学がね，全部を自分で解く感じじゃないんですよ．答えは4択．教科書の問題は，「答えは次の1，2，3，4のどれか」みたいな．公式な教科書で4択．次女は日本の教科書で勉強して数学もよく分かってたからなんだけど，選択肢に一つも正解がない問題があったりして．

原田・村瀬・川村：笑

藤井：そんな教科書使ってて，先生は来なくて，あれって思って探しに行ったら職員室でお菓子パーティーやってたりとか．うちの子はすっごいカリカリしてる子だったんだけど，インドネシアから人間が丸くなって帰ってきた．高 2 の夏に帰ってきてしばらくはそうだったんだけど，公立の進学校で大学受験もあるので，半年も持たずまたカリカリするようになっちゃったけど．

原田：戻っちゃったんだ．

藤井：そう．

川村：私の勤めている学校のあるコースでは 1 年，外国に留学に行くんですけれども，帰ってくるとすごい好奇心旺盛な子になってきます．そのクラスで授業をすると，たくさん質問が出てきます．それで，留学した国の学校はどうだったって話をしていると，彼らが衝撃を受けたことは日本の大人たちとの違いなのかなって．15 時半ぐらいに先生のところに質問がありますっていくと，もう帰るから明日にしてって言われるって．

藤井・原田・村瀬：笑

村瀬：はっきりしてますよね．

川村：なんで日本人こんなに働くんですかねって衝撃うけてますね．

藤井：本当にそれそうですよ．僕の知り合いでジェンダーの研究をしてる人が，スウェーデンにいって聞きとりしてたんですよね．そしたら自分は週に 40 時間労働のうち，何々の仕事が 30 時間，ジェンダーの仕事が 10 時間で，聞き取りしてる間に 10 時間をオーバーしたので，はいこれで今週の私のジェンダーの仕事は終わりです，さようならって．日本から来ててもそうですからね．

原田・村瀬・川村：笑

藤井：そのためだけに日本からいったのに．

原田：「えっ？」と驚くような体験して，何を感じるかですね．

村瀬：そうだと思いますね．

藤井：豊かに生きているもんね．

原田：それでみんなにだっていろんな悲しみとか持ってるだろうけどさ，もちろんそれはそれだからね．喜怒哀楽あるけれども，日本人は喜がないよね．楽しいことないよね．楽しそうじゃない．

藤井：だから大人になりたくないんだよね，子ども達は．社会に出たくないんだよね．大人は幸せそうにみえないってね．

原田：本当にそうだと思う．最近ね，藤井先生とよく話しているのは，自然の問題ですね．この地球もうやばいんじゃないのっていう危機感ですね．今日，郡上八幡に来て，少し川辺とか街中を散策して，すごい綺麗だなって言いながら，地球はまだ大丈夫と思うかもしれないけれども，実際はそうじゃない．教育でもしっかりと教えなければならない点ですね．生き方を変えることも含めて，自然について考える必要があります．その意味でいうと，自然のなかにあまごクラブを設立したことは重要ですね．

村瀬：そうですよね，本当に大きいと思います．

原田：でも，既存の学校は，生き方を変えさせない教育をしてますね．

藤井：みえないようにするからね，不必要に．馬車馬のように働けみたいな．

原田：自然のなかで，どう生きてくかって大事だと思います．無意志な物，自然ってやっぱり意志ないよね．意志はないから意志がないもの対峙するって本当に怖いということを理解する必要があります．やっぱり溺れたことがない人は，川の怖さをわからない．そんな危険なことわざわざやらないでと思うけど．さっきも川を 3 人で見てきて，子ども達だから入れるよって．大人が入ったら死ぬよ．寒くて．

藤井：ほんと，冷たくてね．いや，そうなんだけどね，実際にだから本当に川の怖さとか知らないから，なめてるから，バーベキューして酒飲んで泳いで溺れるっていう．よく溺れてるじゃないですか．

村瀬：川にいる子どもたちのことを，郡上の人たちは川ガキと呼んでいます．川ガキたちの間に

は教え伝えられたものがあって，例で言うと，いろんな石がありますよね．いろんな場所のいろんな石の高さが．川を見ているとやっぱりちっちゃい子達はこの辺でちゃぽんちゃぽんしてて，どんどん学年が上がっていくとこの辺の岩から跳ぶと．それをちゃんと見て，自分で学んでたりしてる．あと，監視してる大人がいない．川ガキが遊んでいる横に，ぷらっと来たおじいちゃんがいたりするんですけど，誰かの保護者とかじゃない．ちゃんと子ども達の中でルールとか，危なさとかを学んでるっていうか．この辺は危ないから絶対飛び込まないって，経験や上級生の背中を見て分かっている．ちょっと橋隔てた辺には集まっていたりして．何ていうのか，自然をちゃんと学んで遊んでるっていう感覚が物凄い．彼ら川ガキを見てるいると，そういう感覚が染みついているんだなって思うんです．

藤井：いやいや文化が伝承されてるんだよね．

村瀬：されてる．岐阜だと川が多いので，いろんな災害があった時にどうしたらそれを防げるのか常にその防止と，その力を抑えることの土木業のことばっかりが重視されるけれども，それは致し方ないっていう風に，自然から受け入れるようなものが結構この土地にはあるというか．晴れているから川に入ってみたけど，流れが速くていつもと違うから，それをぱっと感じて「ちょっと今日は上がろうぜ」，みたいな．

原田：ここは雨降ってなくても上の方がね．

村瀬：そう．上から見てこれは多いからどうこうとかじゃなくて，多いから今日はやっぱり駄目だなっていう風に感じてさっと引ける．こっち側に戻って来れるって言う感覚がちゃんとあるんですよね．多分それがこういう環境に生きているから学べる．毎日自然を見てる人間だから分かるのであって，どうしてもやっぱり県外から来た人だと，その日のそれしかわからない．そのあたり，「どうしたら人と自然はもう少し向き合えるのかな」と思いますね．

原田：感覚的に学ぶってことは，生きていく上で非常に重要です．自然は感覚をみがくための一つの方法ですよ．だから，ああいうきれいな川を見たら泳ぎたいなって感覚的なものですよね．やばいなっていうのも分かりながらね．深いんだろうな，でもあそこの岩から飛び込みたいなって衝動にかられる．でも，怖いんだけどね．

藤井：本当に川は怖いですからね．

村瀬：それもまた知りますもんね．こんなにデジタル社会になって，テクノロジーが進んで人はすごいんだって．学校の中だけだとこれだけ何でも人はできるんだって．タブレットがあれば，

できることがどんどん増えるんだとか．人が世界を動かしていると錯覚する．でもこういうところにぱって放り込まれるとうまくいかないことだらけで．

原田：自然に触れる機会が多いと，怖さという世の中にはなかなか頭で理解できないことがあるということを知ることは重要です．逆に，克服できてることが素晴らしい人間だと教えることは，間違った教育でしょう．教育のなかでもやっぱり無理なことがあることを教えないとまずいでしょう．自然から学ぶことは，無理なものは無理だと知ることだと思います．それを作っておかないと，どこまで行っても厳しく管理することしかできなくなってしまうのではないでしょうか．今日，みなさんのお話を聞いていて，私が辿り着いた一つの結論です．さらに，付け加えるならば，子どもに対峙した時，自然と同じように，彼らもコントロールできない存在であると認識しないことが何より大切なことではないかと思います．

さて，そろそろこの座談会を締めたいと思います．みなさんの結論というか，それぞれのご見解を最後にお話ししていただければと思います．

川村：この座談会を通して，最後にみなさんが指摘された「感覚的に学ぶ」ということが今の学校教育のなかで大事にしたいなと感じました．学校では何か問題が起こると，あれもこれも教えなくてはということになっている気がするのですが，外在的な規範やルールを用いて指導をしたりしているなと思います．でも，外在的な規範とかで指導されても子ども達には響かない，けれど，どうやって指導したらいいか分からない，というのは教師もですし，多くの大人たちも同じではないかと思います．私自身もどう声をかけたらいいか分からないという時はたくさんありますが，そういう時に考えるのをやめないようにしたいですね．そのためにはやはり，幅の広い大人が必要なのではないかなと思います．現在の教員採用試験では対策本があったりとしますが，対策本というのはマニュアル通りで，ルールに従うことに慣れているから読めるのではないかなとも思っているのですが，豊かな人間は想像力をつけるためには「感覚的に学ぶ」ということが子どもも大人も大事になってくるのではないかなと思います．もう一つは，このような座談会でみなさんと議論できるような環境が学校のなかでもほしいなと思いました．とても考えさせられるときでした．ありがとうございます．

村瀬：ドイツ研究の藤井先生，中国研究の原田先生，川村先生ならではの視点がおもしろかったです．フリースクールを立ち上げる際，「徒弟制度のような，見習いの形で好きなことに出合わせる」役割を自分たちが担えたらと考えてました．正直，そういったサポートというのは，今の教育現場ではまだ評価されたり，理解されるには早すぎるのだろうなと思っています．しかし，ドイツや中国ではそうした職業選択の在り方が広がっていることを聞き，現場の先生には「外を知る姿勢」が必要だと感じました．管理教育については，学校の教員間で根強く残る問題に着目し，「教育界の特殊性」や「教員という人間を生きること」に対して意見を交わすことができま

した．学校の中で生きていない「外堀の立場」だからこそ見えることがあるのだと感じました．

藤井：私は話が脱線しやすいので，ちょっと寄り道が多かったですが，皆さんのそれぞれのご経験や考えを窺いながら，実は，全部つながっているんだなということが確認できたように思います．いじめ自死事件がこの対談の実現の発端だったわけですが，まず，教師も親も子どもの自立援助に意識が向きにくくなる環境に何重にも取り囲まれているのだと思います．教員評価のなかでの教師間の競争，その評価内容としての子どもの管理統制．競争社会を家族主義的自助で生き延びていかなければならないなかでの親子関係．その両者に挟み撃ちにされ，友情を育んだり，自由に考えたりすることを奪われている子ども．さらに，それらの状況を引き起こしている競争的教育政策であったり，労働政策であったり，自然からの遊離といった文化・文明論的な広がりをもつ問題も語られました．教育を歪めている問題の大きさに圧倒されるかもしれませんが，子どもたちの自立を支援していこうとする小さな取り組みについても語られました．自然豊かで，多様なしごと資源の豊富な郡上での小さな取り組みが始まっているようです．同じような志をもつ人たちがおそらく全国に点々といるのではないかと思います．いまはまだ小さいかもしれませんが，そのような小さな取り組みが少しずつ増え，点から線に，線から面になっていくことで，動かないと思っていた岩も動かしていけるのではないかという希望も見えてきたのではないでしょうか．

原田：本日はお疲れ様でした．